

宣教する共同体の ありようを求めて

2010 年 プレ宣教協議会 報告書

※ HPにはこの中から抜粋して掲載しています。

※この報告書は各教会に配布されています。



2010 年 8 月 18 日（水）～ 20 日（金）
於 富士箱根ランド スコーレプラザホテル

日本聖公会 プレ宣教協議会実行委員会

■ 内 容

1. 開会礼拝メッセージ
2. 開会の挨拶 （植松誠首座主教）
3. 挨拶～質問に答えて （実行委員長 谷昌二主教）
4. 講演 『聖公会が大切にしてきたもの』（講師 西原廉太司祭）
8. 「数字で見る日本聖公会の現状」（実行委員 木川田道子さん）
9. 現場からの発題（1）『福祉の現場から』（当日の講演より）（講師 鈴木育三執事）
『高齢者の配慮の業—老いの旅路に同伴すること』（レジュメ）
10. 分科会報告
13. 閉会にあたって メッセージ （1）西原廉太司祭 （2）植松誠首座主教...
14. 閉会の挨拶 （実行委員長 谷昌二主教）

1. 開会礼拝メッセージ 「当事者として関ろう」

ダビデ 谷 昌二主教

父と子と聖霊のみ名によって アーメン

イエスがエルサレム目指して旅を続けられる途中、ガリラヤ地方からサマリヤ地方に入るところ、ある村に入られた。そこは、たぶんハンセン病の逃れの村であったと思われます。ほとんど誰も来ることのない所へ、イエスが堂々として入って、近づいて来る。そこにハンセン病の人たち 10 人が出迎え、遠くに立ち止ったまま、大声を張り上げて言います。「イエスさま、先生、どうかわたしたちを憐れんでください。」

今まで誰も入ってこなかった村に、イエスがずかずかと近づいて来る。驚きながら出迎えるハンセン病の人たち。そして、この瞬間しかないと、自分たちの思いを心の底からの叫びでぶつける。それをしっかりと受け止め、イエスは言葉を返す。「祭司たちに身体を見せよ。」 長い間待っていたこの言葉。しかし、今まで、実際には聞いたことのないこの言葉に、素直に従って身体は動く。その素直な心と身体に、神の恵みの力が一人ひとりに注がれる。彼らは癒された。10 人は清くされたのです。

その中の一人が、自分が癒されたことを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。自分を癒してくれた神の力が、誰を通してもたらされたのか自覚した彼は、イエスの足元にひれ伏して感謝した。この人はサマリヤ人。イエスは言われます、「清くされたのは 10 人、他の 9 人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」それからイエスは、彼に言われます。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」

どうしてこのサマリヤ人だけが、イエスのところに戻って来ることができたのか？ どうして、彼だけが、完全な救いにあずかることができたのか？ 彼は、サマリヤ人。わざわざ「この外国人」と言われている存在。他の 9 人はユダヤ人だったのでしょうか。サマリヤ人として、彼らはさんざん痛めつけられ、差別され、苦しみを受けていた。その痛み、苦しみがあつたことで、逆に、救いの喜びが他の者よりも何倍も大きかった。そのことは一つあると思います。もう一つ大きなことがあることに、最近、気付かされました。

先週、8 月 12 日（木）～14 日（土）、GFS の全国研修会が、沖縄で開かれました。本土からと沖縄の人たち 20 名で、3 日間黙想を中心にして過ごしました。神学院のチャプレンの成 成鐘（ソン ソンジョン）司祭が指導してくださいました。その中の一つが、「よきサマリヤ人の物語」を通しての黙想でした。追いはぎに襲われ、半殺しになった旅人を憐れに思い助け、手当てをし、宿屋に運んで介抱したサマリヤ人。その前に祭司、レビ人が、半殺しになって横たわる旅人の遠くを通り過ぎて行った場面。その一つひとつを心に留めて黙想しました。それぞれの場面に、自分がそこにいることを心に留めながら、その思いをじっと見つめていくのです。そして、最後に、どうしてこのサマリヤ人が、旅人を助けることができたのか。

やはり、彼はサマリヤ人として、今までさんざん痛めつけられ、差別されてきたその苦しみがあつて、旅人の痛みを憐れみの心を持つことができた。そこまで、私は何度も思い巡らせていたものですが、そのあともう一つあることに、今回は気付かされました。

それは、このサマリヤ人も又、旅人を襲った強盗と同じ加害する者としての自覚があった。このことを覚えて黙想することへ導かれたのです。これは私にとって初めての体験でした。そうだ、人間として痛みつけられれば痛みつけられるほど、その自分が又、誰か自分よりも弱い者へ、その痛みを投げ返す誰かを見つけて痛みつけてしまう。あるいは、自分自身へとその痛みを向ける。いわば、加害者としての自分がそこにある。神の命を損なう者としての私がそこにいる。旅人を助けたサマリヤ人の中にあるこの加害者意識に気付かされ、私の中にもそれがあることに気付かされ、目が開かれる思いがしました。

今日のサマリヤ人、身体が清くされて、大声で神を賛美しながらイエスの足元にひれ伏し感謝した。このサマリヤ人の中にも、この被害者としての痛みとともに、加害者としての苦しみ痛みを同時にもっていたのではなかったか。イエスによって、それが受け入れられ、赦され、そして癒された。その大きな喜びにあずかっている、その姿を見たいと思います。

この世の中で、人びとが痛み苦しんでいる。私も又、苦しんでいる。と同時に、この私も又、加害者として、苦しめている側に立っている者である。この自覚をもって初めて、真剣にこの世と関わっていく道が開かれていくのではないのでしょうか。そして、その私を、イエスは新しい命で生かしてくださるのです。自らの責任の自覚をもって、苦しんでいる人に寄り添い、共に生きていく共同体としての生き方。そして、その私が、イエスを通して、神の新しい命に生かされている喜びを、神に向かって大声で感謝し、賛美する礼拝を共に捧げる共同体としての生き方。これからの私たちの教会の生き方は、この二つに示されているように感じます。

今回、こうして日本聖公会プレ宣教協議会に集められましたことを、神に感謝します。非常に厳しい私たちの教会の現状。あるいは、本当に切迫している社会の現状。これを共に話し合い、私たちがこの現状を打開するために何ができるのか。共に祈り、共に考えていこうとしていますが、どうかその時、何かこれらの状態を、他人事のように考えないで、自分も又、その中で、今の窮状を招いている者、大きな責任を担っている者、加害者というか、その責任は、この私の中にあるという自覚をもって関わっていただきたいのです。それぞれ自分の責任としての関わり合いの中でこそ、話し合いが真剣に、また、有効に進められていくものだと思います。

その当事者としての自覚の中で、イエスに出会い、赦され、支えられ、解放されて、新しい命に生かされる神の恵みに出会うことができるのです。そして、その新しい命に生かされる喜びを分かち合い、心から神を賛美する恵みにあずかることができるのです。そして、新たにこの救いの喜びをもって、今苦しんでいる人々に寄り添い、共に生かされる歩みへと導かれていくのです。これからの私たちの目指すべき共同体のありようは、この二つに集約されると思います。神に素晴らしい賛美をささげて礼拝する共同体。そして、当事者としての責任を負いながらも、救いの喜びをもって、今、苦しんでいる人に寄り添い、共に生きる共同体。

「宣教する共同体のありようを求めて」のこの協議会に、父と子と聖霊なる神の恵みが豊かにありますように。アーメン

2. 開会の挨拶

首座主教 植松 誠

まず会を始めるにあたって、この会を準備してくださった人たちに感謝したいと思います。今日の日を迎えて私は本当に興奮しています。長い準備を経て、いよいよプレ宣教協議会が実現する。私はこの日を「お祭り」だと考えています。そして日本聖公会に属する私が、あなたが、ここに来たことをまずお祝いしたい。今日ここに着いて私もすでにいろいろな人に会いました。あれ！あなたもいる、私もいる。そんな私たちは日本のあちこちから時間と労力とお金をかけて今日ここに来ました。そういうことをしないと私たちは集まりません。だから、まずみんなでこの「お祭り」に集うことができたことを、喜び祝うことを最初に提案したいと思います。

今日、来るとき、熱海駅のバス乗り場で出会った人々に、「この人ももしかしたらプレ宣教協議会に？」「この人も？」と期待して会釈しました。でも違いましたけど。(笑い) 3日間で、今まで存じ上げなかった人と知り合いになることができると思います。そしてたくさんさんの日本聖公会の「宝」を感じ取って帰りたいと思います。

前回の宣教協議会から既に 15 年が経ちます。私はその時、総主事をしていました。1995 年の宣教協議会は日本聖公会にとって、初めて過去をクリティカルに振り返った大きな出来事でした。今も覚えているのは、当時の宣教主事が主教会に宣教協議会の話をしに来たときの悲壮な顔。そして主教たちの冷やかな態度。(笑い) 95 年は、率直に言って、全体でやったはずなのに、残念ながらみんなの参加があったとはいいがたかった。大変苦勞しました。そしてそこで出てきたものに対しても全体が自分のものにすることができなかった、そのような反省があります。

「日本聖公会の諸課題」は果たして全体のものとなり得るのか。今日、北海道から来た 5 人、沖縄から来た 5 人、その 5 人で語っていること、それは全体のことなのでしょうか。

「日本聖公会の福音理解」はみんなのものになるのでしょうか。プレにしても、2012 年にしても、私は議論がみんなのものになって欲しいと思います。そのためには、宣教局長とか「長」たちだけでなく、「草の根」を含んで欲しい。そのための“根回し”が今回どこまでできたのかは少し心配ですが、集まった人たちの思いをこれから共有していくことはできると思います。ここで話し合われることを各教区、教会で浸透させて欲しいと思います。そして 2012 年が本当にみんなのものになっていくように。3 日間、ここで出たことをみんなの教会で分かち合えるように。

谷主教のメッセージにあったように、私たちは「傍観者」ではありません。そこにとどまっていたは課題の解決の歯車のひとつにはなれません。もちろん大いに批判することも結構です。“多様性”は私たちの「宝」。今日ここにいる 1 人ひとりも違う。文化も違う、教区の財政状況も違う。そんな私たちがここに集められているのです。この「宝」に感謝し、だからこそ私たちの教会はすばらしい、と言って帰れるように。

皆さん「お祭り」おめでとうございます！

3. 挨拶～質問に答えて

実行委員長 主教 谷 昌二

開会礼拝のメッセージで、このプレ宣教協議会に対する私の思いをお話しさせていただきましたので、ここでは、この協議会に対していただいている参加者の皆さまからのいくつかの質問にお答えする形で、この会の方向性を皆様と共に考えることができればと思います。

まずご質問の一つは、このプレ宣教協議会の位置づけについてです。この集まりは単なる勉強会ではないはずですが、そうであれば参加者は何を期待されているのか、2012年の協議会に向けて何をアウトプットとして求められているのか、ということです。

これについては、開会礼拝のメッセージでもお話ししましたとおり、参加者一人ひとりが、現在私たちの教会が抱えている非常に厳しい現実の、責任ある当事者として、何ができるかを「共に」考えていきたい、ということです。そのために、2日目に10の課題に分かれて分科会を行うことになっていますが、これらは、大きくは二つの課題に分けられると思います。

① 私たちの信仰をどのように養い、教会とその礼拝生活をどのようにして豊かにする
のか。分科会 6～10

② 主イエス・キリストに救われ、生かされている喜びと愛をもって、この世にどのように仕えていくのか。分科会 1～5

これは、実は二つではなく、車の両輪のように、互いに関連し合っているものであるとして理解し、私たちの教会共同体の厳しい現実を分析して、課題を克服していきたいというのが私たちの願いです。

二つめは、レポート1にまとめられた「①信徒の減少 ②聖職の不足 ③財政的危機」という課題についての取り扱われ方についてです。これらの課題は、最も重要であり、全教区・教会に共通するものと考えているが、これらの課題は、「目に見える現象」であり、背景にはそれを引き起こしている要因があります。課題を解決するためには、その要因を整理し、要因を解消するために最も有効な方向を探索するというのが一般的な考え方だと思うが、今回のプレ協議会において、上記の三つの課題がダイレクトに取り扱われていないと感じられるが、というご質問です。

上記の三つは、10の分科会で取り上げられていますが、それが「最重要課題」としてダイレクトに取り扱われていないと感じておられるようですが、1.の質問・応答と関連して、教会生活、信仰生活に喜びがあって、それが生きた形でこの世に証することができれば、信徒が育ち、その中から聖職も生まれ、そして、献げる喜びも増してくる。三つだけの問題ではなく、全体に関する問題として捉える必要があると考えます。

三つめのご質問は、今回、各教区で本当に宣教のために力を出している宣教担当者が参加を義務付けられていないのは何故かということです。

この協議会の準備の最初に、各教区の常置委員長と宣教担当者の会を持ちました。そのために「三つの質問」に答えていただいて、各教区の宣教の実情を踏まえて、これからど

うするのかということを目的としてきました。それがレポート1、2として纏められています。宣教担当者の皆さんの積極的な参加から出発しています。

今回は、「担当者」という方々のご出席を必ずしも義務付けられなかったのは、1995年の宣教協議会の反省として、限られた方々だけの参加ではなく、出来るだけ色んな分野で、教会・教区・管区の働きを担ってくださっている方々の参加を求めたからです。今回の参加者の皆さんの働きは多様で、又、年齢、男女のバランスも良いように感じます。短い期間ですが、豊かな話し合いができるのではないかと期待しています。どうかよろしく願います。

4. 講演 『聖公会が大切にしてきたもの』 (8月18日 15:10~17:20)

講師 西原 廉太司祭

プロフィール：1962 年生まれ。京都大学工学部卒業。聖公会神学院卒業。立教大学大学院文学研究科組織神学専攻終了。現在、立教大学キリスト教学科、立教大学大学院キリスト教学研究科教授。立教大学副総長、立教学院院長代行。



(※以下に掲載した内容は、講演記録ではなく当日講師が用意されたレジュメです)

1 はじめに

2 歴史の中に埋もれた宣教史に光を当て学ぶこと

- ・「聖公会が大切にしてきたもの」でまず語りたかったこと。
- ・聖公会につらなる人々の貴重な宣教の歴史に光を当て学ぶ。
- ・ベッテルハイム以来、164 年の宣教の歴史にあって、地道ではあるけれども、すでになされてきた貴重な宣教の歩みを丁寧に拾い上げ、そこから学ぶことが実は決定的に大切。
- ・両角平左衛門（もろずみへいざえもん）さんの歴史。聖公会中部教区、長野聖救主教会の信徒。仁礼（にれ）村（現在の須坂市）の警察官。上田聖ミカエル及諸天使教会、松本聖十字教会、辰野聖公会に転籍、1916 年に再び長野の教会に。1936 年に横浜教区の銚子諸聖徒教会で葬送式。60 年の生涯。
- ・両角さんが、豊科警察署長、岩村田警察署長をされていた頃。1921 年の信濃毎日新聞の記事。南安曇郡のある村で、被差別部落の青年たちが青年会に加入したいという希望を村の長老たちが拒否。仲裁に両角さんが入り、再度の仲裁で被差別部落の人々への差別を止めることを理解させた。「涙とともに話す、心からの戒めに長老たちがはっとして後悔した」、「両角さんの教えようとしたことは意味が深く、そしてひたむきなもので、その重々しく熱意にあふれていた慎重な態度は、壇の上で神の摂理を語り、愛の福音を教える牧師のようであった」。
- ・1922 年の「信濃佐久新聞」に岩村田警察署長となった両角さんの記事。臼田町で、部落差別反対の集会が開かれ、その集会を監視するために臼田警察署長をはじめとする警察官の前で、両角さんは、私服で参加し、岩村田署長でありながら、警察官の不合理さと、差別撤廃について、堂々と演説。その出来事の直後に、突然、警察署長を退職。免職と報じられる。自らの職をかけて、人間の命の尊さ、人間の尊厳の大切さを、身を以て行動し、主張した両角さんの根底には、間違いなく深い信仰があった。このような信仰の先達が、私たちの聖公会の歴史にあることを心に刻みたい。

- ・岡谷聖バルナバ教会の歴史。2008 年 6 月に聖堂聖別 80 周年の記念礼拝。カナダ聖公会のホリス・コーリー司祭が宣教。ミッションの指示を拒否し、諏訪の一带で最も重荷を背負わされている人々のため、最もしんどい思いをしている人たちのために聖堂を建てることを決断。「女工」さんのための教会。97 歳の元「女工」の信徒さん、深沢小よ志さんの証言。「なけなしのお小遣いを献金として手に握りしめながら教会に駆けつけると、階段の下で背の高い青い目の司祭さんが待ちかまえていて、よく来たねと言って私を抱きしめてくれた。お説教の意味はほとんどわからなかったけれども、司祭さんが抱いてくれた温かさに私は涙が溢れた。教会は確かに天国だった」。
- ・教会は彼女たちが癒やされて、慰められて、励まされて、そして自己の尊厳を回復していく、自らの尊厳を取り戻していくための場として存在。これもまた聖公会の歴史。著名な牧師や神学者、あるいは大きな教会や大きな学校、事業の歴史だけではなく、小さいけれども民衆の涙を確かに拭った貴重な歴史の一つひとつに光を当てること。
- ・聖公会という教会が大切にしてきたものに、尊厳や存在を奪われてきた者たちへの目差しというものが確実にある。私たち聖公会の宣教の最も基本的な規範。このような視点から、私たちの教区、教会の歴史をぜひ掘り起こしてみたい。

3 時間と空間を超えたつながりの中にある聖公会

- ・「聖公会が大切にしてきたもの」で語りたかったことの 2 点目。私たちの聖公会とは、時間と空間を超えたつながりの中にある教会である、ということ。597 年以降のオーガスティンによる英国伝道、ケルトのスピリチュアリティと聖公会の関係。
 - ・ローマのベネディクト会修道院長であったオーガスティンは 597 年に英国カンタベリーに到着し、初代カンタベリー大主教に。597 年は、私たち聖公会のルーツ。初代オーガスティンの 597 年から、昨年 9 月に日本に来られた第 104 代カンタベリー大主教、ローワン・ダグラス・ウィリアムズに至るまで、私たちの聖公会の歴史は連綿とつながっている。
 - ・「ケルト・キリスト教」が、オーガスティンが英国に行く前からすでに存在。非言語的なもの、感性的なものを大切に。ケルト・キリスト教には二つのキーワード。その一つが **harmony**、調和であり、もう一つは **eternity**、永遠。「闇から光へ」というイメージ。「絶望から希望へ」という明確な考え方。そのようなケルトの豊かさも私たち聖公会のルーツ。私たち聖公会はケルト的なものとローマ的なものの両方を大事にしている。
 - ・日本人のスピリチュアリティと、ケルトのスピリチュアリティには深い共通性。「ケルトの紐組紋から感じる生命美は、縄文土器の縄文から感じる生命美と信じがたいほど類似（岡本太郎）」。
- 林紀美子教授（京都産業大学文化学部国際文化学科）は、古代ケルトの詩と古代日本の歌の共通性を指摘。日本の妖怪信仰とケルトの妖精信仰にも、極めて強い近似性。聖公会のルーツであるケルト的な要素を、ことに日本聖公会に属する私たちは、その宣教において十分に生かしていく可能性があるのではないか。

- ・聖公会は空間を超える広がりを持つ。世界の聖公会を「アングリカン・コミュニオン」(Anglican Communion)と言う。Communion とは有機体的な交わりという意味。現在、世界約 160 カ国、44 管区（合同教会等含めて）があり、信徒数は約 8,000 万人。プロテスタントの中では最も大きな教派。アングリカン・コミュニオンは、国連の正式なオブザーバー。
- ・私たちの日本聖公会の一つひとつの教会は、この時間と空間を超えた結び目の中に存在している。私たちは、この時間と空間を超えたつながりの中に生きているのだということを確認したい。私たちの宣教にとっても計り知れない賜物。

4 聖公会の *VIA MEDIA* から学ぶもの

- ・信徒を中心とする改革としての英国宗教改革。『祈祷書』がいかに重要であるか。
- ・「分散された権威」としての「聖書」「伝統」「理性」。ことに「伝統」理解は、私たちの宣教にとっても基本的な土台となる。リチャード・フッカーは *tradition* としての「伝統」と、*traditionalism* としての「伝統主義」を明確に区別。*lifeline* としての *tradition*、「伝統」。イエス・キリストのミニストリー、イエス・キリストが言われたことやなさったこと、つまりはイエス・キリストの福音が心臓だとして、そこから動脈のようにして時代を超えて血液が流れてくる。それが *lifeline* としての「伝統」。
- ・フッカーは *traditionalism*、「伝統主義」を否定。*dead hand*、死せる手枷足枷、過去の束縛。このような伝統理解を聖公会は持つ。
- ・『三十九箇条』第 34 条『教会の伝統について』『伝統や儀式はどこにおいても同一であったり、あるいはほとんど似通ったものであったりする必要はない。なぜなら、これまでも伝統は常に多様であったし、国、時代、人々の慣習の相違にしたがって変化することもあるからである。』
- ・イエス・キリストのミニストリー、働きを、その時々、その時代の状況、いわゆる「コンテキスト」(文脈)の中で解釈し続ける。ここに私たちが宣教というものを考えるヒントが隠されている。聖公会が大切にする「伝統」と「宣教」とは、実は表裏一体。私たちが「宣教」を語る時に、それをいかに神学的に、「伝統」とのつながりで語りうるのか。
- ・アングリカニズムの特徴を見事に表現してきた言葉に、*VIA MEDIA*。フッカーが用いはじめ、また後のオックスフォード運動を導いた 19 世紀の神学者、ジョン・ヘンリー・ニューマンなども再び強調。フッカーが用いた *VIA MEDIA* の本来的な意味とは、「私たちは真理を求める旅人だ」ということ。カトリックの伝統絶対主義、教皇絶対主義の立場を聖公会はとらない。ピューリタンの極端な「聖書のみ」、聖書絶対主義もとらない。そのようなあらゆる絶対主義をとらないのが聖公会。聖書・伝統・理性という道標を頼りにしながら、解釈し続ける、歩みを続ける、真理を求めて旅をし続けることを聖公会は大切にしてきた。

5 聖公会の「主教職」理解

- ・私たちが「宣教」について考える上で、聖公会が本来大切にしている「主教職」が持つ神学的な意味を理解することは、きわめて重要。
- ・1988年ランベス会議（10年に一度全世界の聖公会主教が集まる会議）は、主教職の内容を確認。①宣教における教会一致の象徴②信仰の教師、擁護者③信徒及び牧会者に対する牧会者④御言葉の説教と sacrament 執行の権限附与者⑤信仰共同体が置かれる世界に対する宣教の先導者⑥神の民を養育し配慮する牧者⑦社会の傷を癒す者⑧地域教会が働く社会における良心の声⑨愛による贖いの福音に照らして神の正義を宣言する預言者⑩家族の全体、その痛みと喜びにおける頭、家族の生活と愛の中心。
- ・これらはすべて古代教会における主教職理解に原点を持つ。
- ・「教える者としての主教職」。主教職はティーチング・ミニストリー、教える職務。
- ・「先導者、預言者としての主教職」。教会のみならず世界・社会の方向性、ヴィジョンを提示しなければならない。
- ・主教職は「ティーチング・ミニストリー」であり「リスニング・ミニストリー」。信徒、聖職の話に耳を傾けるだけではなく、地域や社会の声、民衆の声や動きに傾聴する職務。
- ・「一致の焦点としての主教職」。グローバルな、普遍的(catholic)な教会のつながりと、地域の教会とを結び付ける一致の焦点。ローカルな視点とグローバルな視点をダイナミックにつなげていく働き。そのためには、主教職は、地域の現場における個々の現実的課題に深くコミットすることと同時に、世界的な、グローバルな流れや動きをつかみ取り、その意味を汲み上げていくことが求められる。過去・現在・未来という時間を結んでいく「一致の焦点」。
- ・時間と空間を超えた一致の焦点としての主教職理解は実に重要。世界の教会をつないでいくグローバルな「共時的」な意味と、古代・現在・未来と時間を超えた「通時的」な意味がある。これらの主教職の内容は、すなわち教会の宣教の働きと直結。
- ・多様かつ重大な主教職は、一体どのようにして担われるのか。主教職の内容は、ただ主教個人によってなされるものではない。アングリカニズムは歴史的に、主教職を、「人格的」(personal)、「団体的」(collegial)、「共同体的」(communal)という3次元で理解してきた。もちろん人格、個人としての「主教」の存在は不可欠。しかし同時に、教区の聖職団は「団体的に」主教職を担い、さらには、信徒も含めて「共同体的に」主教職を担っている。アングリカン・コミュニオンで言えば、ランベス会議や首座主教会議は団体的主教職であり、信徒、聖職、主教で構成されるACC（全聖公会中央協議会）は共同体的主教職。
- ・主教職とは、教区すべての者たち、神の民全体で担い、分かち合うものであるということを改めて確認したい。「エписコパル・リーダーシップ」を如何にして協働的に教区教会全体で分かち合うか。上述したような主教職に加え、教区、管区の管理運営的、行政的責任も主教職には当然要求されるが、それを一人の人格にのみ課すことは実際、不可

能。

- 主教を批判するということは、その主教職を共に担っている、私たち自身を批判すること。足りない主教職の部分を他の聖職、信徒で団体的、共同体的に担えば良い。人格的主教を中心にして、主教「職」を担い合う道を模索し続けることが求められる。主教とは主教職の＜アンカー・パーソン＞。主教と共に走り、あるいはバトンを繋いでいくのは、聖職、信徒すべてを含めた一人ひとり。
- 主教職を、人格的、団体的、共同体的という3次元で理解するのは、聖公会のみならず、エキュメニカルな合意事項。主教職には、実は、人格的主教制、長老制、会衆制それぞれの要素がダイナミックに融合している。聖公会は人格的主教職を重んじているが、同時に、聖職会議、総会、教区会という形で、団体的、共同体にも主教職を実践している。ルーテル教会は、むしろ、教会会議において団体的、共同体に主教職を理解しているが、例えば、日本福音ルーテル教会も、議長という形で人格的にも主教職を発揮している。つまり、この3つのどこに重点を置くかという違いであって、いずれも、3つの要素を大切にしている。
- 私たちは主教職の内容を、すなわち、宣教というものを、ただ聖公会だけで行おうと思わなくてよい。宣教をめぐる議論の中には、エキュメニカルに共に担う、という視点を入れる必要。

6 聖公会の「牧会的配慮」と公共性理解

- 聖公会の宣教論を考える上でも「公共性」という概念は有効。
- 「公共性」とは、「公」でもなく「私」でもない「公共性」。単純な「公私二元論」ではなく、個人の存在や尊厳を大切にしながら他者との繋がりを切り開き、国家の枠組みに組み込まれることなく、社会、共同体に対しても責任応答的に関わる態度こそが、聖公会が大切にしてきた「公共性」の内容。
- 英国教会は、成立以来「国教会」。この英国における教会と社会、国家の特別な関係が、聖公会の教会と社会の関係理解に与えた影響は大きい。教会は常に国民全体に対して責任を持つ、というのが基本的スタンスであると同時に、時に国家政策と教会政策の間には大きな緊張関係をはらんだ。
- このような原則が实际的に地域的に展開される基盤として「パリッシュ」(教会区)制度。近年このパリッシュ理解をある意味で逆手に取って再解釈しようとする動き。国教会としての英国教会は数世紀前までは、英国教会の信徒＝英国国民という前提条件が成立。すなわち、教会の“pastoral care”(牧会的配慮)とは、パリッシュに住む信徒への配慮であるが、それは同時にパリッシュの全地域住民に対する配慮を意味していた。地域社会における課題に対して責任を持つことが、教会の牧会的配慮の内容に必然的に含まれていた。
- したがって、聖公会の宣教師たちが、どこにおいても、教会のみならず学校や病院を建

てていったのは、教会の「牧会的責任」として当然のこと。この英国教会の伝統的な牧会理解を、国教会体制のない聖公会においても、むしろ大切にできるのではないか。教会が置かれている社会の課題に関わることは、実はすぐれて「牧会的」な働き。明日の分科会のテーマはいずれも「牧会的」な課題。

- ・ウィリアム・テンプルは、聖公会の公共性を見事に表現し実践した者の一人。1921年にマンチェスター教区主教に按手。1924年に開催された COPEC 会議（キリスト教政治・経済・市民会議）を主管、この中で、「政治・経済・市民社会」という主題がまさに教会の宣教の課題であることを明確に宣言。テンプルは、教会が積極的に社会の中へ踏み込んで行く必要性を痛感。1926年の鉱山労働者のゼネスト仲介を通して、テンプルは労働者の権利獲得の立場から積極的に動き、時の首相ボールドウィンに「教会の出る幕ではない」と激怒させたが、この件を通して「労働者の側に立つ教会」という立場を明らかにした。
- ・テンプルは時に、社会的ラディカリスト、リベラリストと見られるが、実際には、神学的には明確な sacramental 主義、ハイ・チャーチの立場に立っていた。テンプルにとって教会の社会的働きと教会の sacramental な性質とは不可分なもの。キリスト者、教会の関心は sacramental 宇宙、つまり全ての被造世界に向けられなければならない、したがって教会の sacramental な働きは、教会の枠内に留まることは許されない。それは世界へ、社会へと拡張されなければならないという確信。テンプルにとって、このことが最も目に見える形で表されるものが他にもない「聖餐式」であった。聖餐においてキリストの犠牲を記念するということは、社会的隣人を覚えることであり、キリストにおいてあらゆる差別、抑圧などの隔ての障壁は乗り越えられるという確信が聖餐において表現される。陪餐に与かることによりキリストのミニストリーに与かり、教会から世界、社会へと派遣されていく。聖餐におけるパンとぶどう酒は、神と人間の協働性と社会性の象徴。
- ・テンプルは、聖餐を未来社会のヴィジョンとして象徴的に理解。教会そのものを sacramental なものとして捉えることにより、教会がこの世界で、社会で現実的働きを担うことの根拠を明らかにした。
- ・教会と社会の関係についての、聖公会における基本原則は、“critical solidarity”（批判的連帯）という言葉に要約される。“solidarity”として、社会が必要とする事柄に対して教会は共感し、実際的な責任を持つ、ということが表現され、“critical”において、教会は常に国家や権力とは距離を保ち、必要に応じて批判を加えていく「見張り」としての責任を担うことが意味される。国家社会福祉の確立以前から社会奉仕、社会福祉という「公共的責任」は英国教会が担っていた。それは“solidarity”としての教会、主教職のつとめ。
- ・12世紀のカンタベリー大主教トマス・ベケットから、21世紀に至るまで、国家、政治の誤った方向性に対して明確な「否」を示す“critical”な役割も大切な伝統。日本聖公会が、この“critical solidarity”という原則をどのような形で具体的に表現し、実践しうるのか。

7 アングリカン・コミュニオンの宣教理解

- ・1988年ランベス会議は、私たち聖公会の「宣教の場」をこのように定義。「宣教の場は全世界である。すなわち、飢えた世界、不正な世界、怒れる世界、恐怖の世界である。汚染され、回復不能な損害の危険の中にある世界である。しかし、それはまた、善意と愛が溢れている美と希望の世界でもある。正義と完全と平和を求めて苦闘している世界でもある。」
- ・ACC-6（1984年、ナイジェリア）は、アングリカン・コミュニオンにおける「宣教の4指標」を決議。①神の国の福音を宣言すること②新たな信徒を、教え、洗礼を受け、養うこと③愛の奉仕によって人間の必要に応えること④社会の不正義な構造の変革に参加すること。ACC-8（1990年、ウェールズ）で、さらに第5の指標が加えられた。⑤被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするため努力すること。この5つが、私たちアングリカン・コミュニオンの「宣教の5指標」。
- ・ACC-9（1993年、ケープタウン）は、アングリカン・コミュニオン全体で「宣教」をめぐってさまざまな角度から研究し、方向性を提示するための特別常置委員会“Missio”を設置。Missioは、ACC-11（1999年、スコットランド）に最終報告『宣教における聖公会の私たち－変革への旅－』（*Anglicans in Mission - A Transforming Journey*）を提示。
「宣教の5指標」について、この重要性を再強調する一方で、宣教を行う視点がこの5つしかないと考えられてはならず、それぞれの聖公会が置かれている文脈（コンテキスト）の中で、より創造的に考えられなければならない、これら5指標も改訂、増補されていくべきであると指摘。（*編集部注：＜資料2＞をご参照ください）
- ・ACC-14（2009年、ジャマイカ）は、「宣教の6番目の指標」について決議。平和、紛争解決、和解をキーワードとした新たな宣教指標を加える検討を開始。
- ・近年で最も大きなアングリカン・コミュニオンの世界宣教会議は、2007年3月に、南アフリカで開催された‘Towards Effective Anglican Mission (TEAM)’（「より効果ある聖公会の宣教をめざして」）会議。30管区、56カ国から代表が参加、ローワン・ウィリアムズ、カンタベリー大主教、キャサリン・ジェファーツ・ショーリ、米国聖公会総裁主教、植松誠、日本聖公会首座主教、はじめ6名の大主教も参加。青年たちによる宣教会議も同時並行で開催。
- ・TEAMでは、世界中の経験や物語が分かち合われ、聖公会が大切にする「多様性の一致」を実感するものとなった。‘Anglicans United in Mission’（宣教において結ばれた聖公会の私たち）、‘Communion in Mission’（宣教における交わり）といったキーワード。世界聖公会は、世界各地の紛争や貧困、暴力や環境問題などを解決するために、内部的な分裂をしている場合ではないことを確認。
- ・同会議の目的の一つは、「国連ミレニアム開発目標」（MDGs）に対して、アングリカン・コミュニオンとして具体的に応答すること。「国連ミレニアム開発目標」とは、2015年までに達成すべき8つの目標。①極度の貧困と飢餓の撲滅②普遍的初等教育の達成③ジェ

ンダーの平等の推進と女性の地位向上④幼児死亡率の削減⑤妊産婦の健康の改善⑥HIV／エイズ、マラリアその他疾病の蔓延防止⑦環境の持続可能性の確保⑧開発のためのグローバル・パートナーシップの推進。

- ・ **TEAM** 宣教会議でのハイライトは、開会聖餐式での、ローワン・ウィリアムズ、カンタベリー大主教の説教。カンタベリー大主教は、その中で、すべての人の声が聴かれる世界となるために働くことの重要性を、ルカによる福音書 15 章の「見失った羊」の物語を中心に強調。またさらに、教会の宣教を、聖歌隊の指揮者に譬えてこう語った。「聖歌隊の指揮者にとって最も重要な任務とは、大声を出して歌う人や、音を外している人に注意を与えることではない。その任務とは、声の出ていない人、聴き取れないほどの小さな声の人の存在を、敏感に感じ取れることだ。そして、『あなたの声が聴こえなければ、この聖歌隊は無いほうが良いのだ』と語りかけることなのだ」。
- ・ このカンタベリー大主教のメッセージの中に、私たちの「宣教」の原点がある。この世界、この社会の片隅で、さまざまな困難や悲しみ、孤独の中で、声を出すことができないでいる者、かすかな声で癒しと救いを求めている人々の存在を、聴き取ることが、すなわち、私たちの「宣教」。

8 おわりに

- ・ 私たち聖公会の宣教の原点は、実はきわめてシンプル。信徒への牧会はもちろん、教会のあるパリスシュ全体、地域全体に対する牧会的働きを、ていねいに実践していくこと。その地にある、かすかな声に耳を傾けていくこと、声を出せない人々の「声」となっていくこと。パリスシュにある課題、そしてまたこの世界にある課題に、教会として取り組むこと。
- ・ それら課題とは、**貧困**であり、**高齢化社会**、**正義と平和**、**社会的少数者**、**ストレス社会**であり、**青少年**、**子どもたち**への関わり。私たちの日常の**礼拝と祈りの生活**が、こうした牧会的課題としっかりと結びついた時に、それらは生きたものとなる。こうした牧会的働きを共に担うために聖職、信徒使徒職という、**宣教の担い手**を育てる必要。
- ・ 私たちの教会が、一人ひとりを抱きしめていくこと、温もりを与えていくことが、宣教。日本聖公会は、現在どの教区、教会も**財政**状況の逼迫に苦しんでいる。しかし、この問題を解決する特効薬などではなく、むしろ教会の宣教の原点、教会としての牧会的働きの原点に立ち帰ることによって、道筋が備えられてくるのではないか。「2 匹も魚があるじゃないか、5 つもパンがあるじゃないか」「幸いなるかな貧しき者」と励まされた主に堅く信頼すること。
- ・ 日本聖公会には現在、北は北海道から南は沖縄まで約 300 の教会、礼拝堂、伝道所がある。すなわち、日本聖公会は、約 300 もの「ミッション・ステーション」から成るネットワークを全国に張りめぐらしている。しかも私たちは、**アングリカン・コミュニオン**というグローバルなネットワークの中にもある。これほどのネットワークを持つ NGO は、そう

そうない。私たちのそれぞれのミッション・ステーションが、地域における牧会的働き、公共的働きを担う時に、社会に対する貢献力は計り知れないものとなる。その結果、聖公会の地域における信頼度は高まり、それは最終的には信徒数の増加、献金額の増加といった教勢の強化、という果実をもたらすに違いない。私たちの「ミッション・ステーション」が有効に働くために、どのような**組織**が相応しいのかを検討し、**教区間協働**、教区再編などの方策が模索されるべき。

・聖公会は、主の十字架と復活を証しし続ける共同体。神の正義、平和、そして、＜いのち＞を証し続ける者の群れ。古代教会からの使徒的(*apostolic*)な時間を超えた繋がりと、世界に広がる普遍的(*catholic*)な空間を超えた繋がりの中に、実は、私たちの聖公会につらなる一つひとつの教区、教会、信徒、聖職も結ばれ、生かされていることに、大いなる感謝を主にささげたい。(以上)

8. 数字で見る日本聖公会の現状

(8月19日 11:00~11:40)

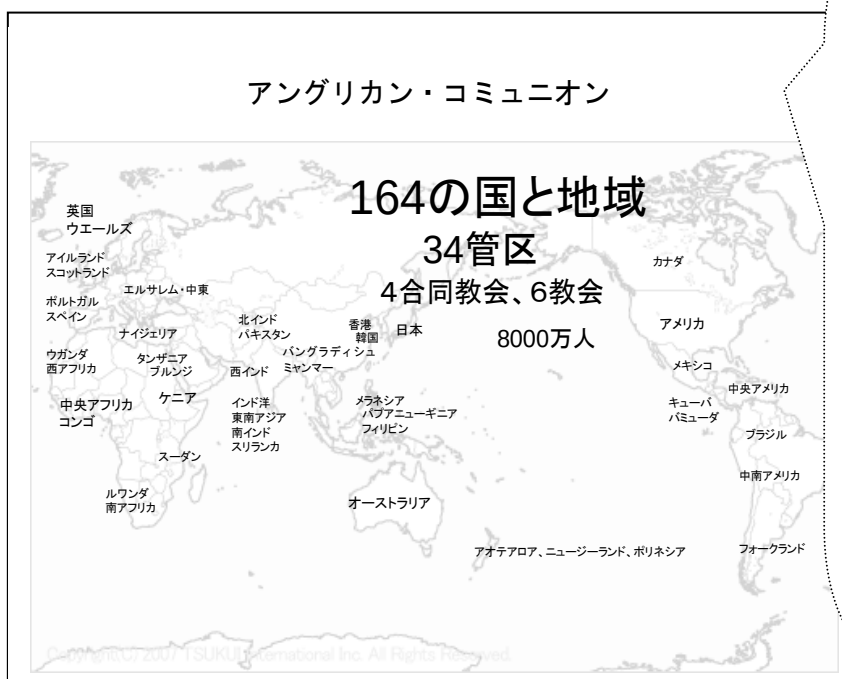
「3つの質問の1. 直面している問題は何か?」という問いへの各教区からの回答では、ほとんどの教区が「信徒数の減少」や「教役者の不足」を挙げていました。私たちの教会の現状はどうなのでしょう。

発表者：木川田道子（実行委員会）

榊先生のお話の後で、ザルのようなグラフを見ていただくのは気が引けますが、(笑い) できる範囲のところで、ということでお許しを願ってお話させていただきたいと思います。

私がこの作業を引き受けたんですが、引き受けてしまって後悔しました。というのは理由は二つありますが、一つは、どういう数字を持ってきたら教会の現状を表す数字とすることができるのだろうか、と数字を探す中で「いったい何をもって教会の働きとするのか?」ということのを改めて考えさせられた、ということがあります。もう一つは、各教区、教会は、さまざまな経緯を経て、個別の状況があり、そこで起きている課題はそれぞれの状況の中で解決に向けて考えていくしかないと思いますが、それをどうまとめて数字として出せるのかと考えたり、あるいはそのことで何かが見えなくなるかも知れない恐れなどを感じたりしながらの作業だった、ということがあります。でも確かに共通して起こっている現象もありますので、数字は教会の現状を知る手がかりの一つとはなるかもしれない、と思います。日本聖公会の現状を考えるための「きっかけ」としてこの時間を聞いていただければいいのではないかと思います。

(数字は管区事務所作成の統計表に基づいています)



これは、日本聖公会は世界の聖公会とどのようなつながりの中にあるのか、という図です。日頃、世界とのつながりを意識することは少ないかも知れませんが、アングリカン・コミュニオンは世界に広がっています。

* 4 合同教会 6 教会を足して 44 管区とする場合もあります。

日本聖公会

11教区

教会 279

教籍のある礼拝堂、伝道所含む

在籍信徒数 53,694人

現在受聖餐者数 18,214人

学校:14法人

幼稚園:96園

保育所:47

諸施設:約40法人 約100ヶ所

(2009年度統計)



「在籍信徒数と現在受聖餐者数」・・・現在受聖餐者とは、年2回以上陪餐を受けられる、言わばアクティブな信徒ということになるかと思いますが、その数は、在籍信徒数と、かなり大きな開きがあります。

「諸施設」・・・昔と違って教会はかなり多様な働きをしており、どういう施設をそこに含めるかで数字が変わってきます。

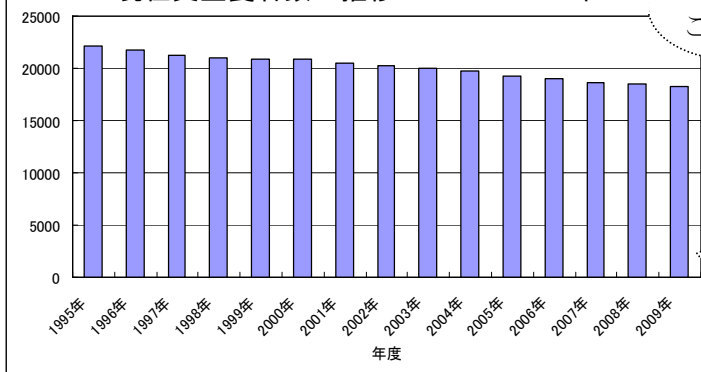
各教区の直面している問題

信徒数の減少、教役者の不足、ストレスを抱える教役者が増えた、青少年が教会に來ない、不参信徒の存在、全体的に高齢化

教会施設の整備、教区財政の逼迫、地方教会の衰退・・・

「3つの質問」で出てきた各教区が直面している問題のまとめです。各教区、優先順位の高いものから挙げられたと思いますが、今、多くの教区で共通して、このようなことが起こっています。

現在受聖餐者数の推移 1995～2009年



1995年 22,095人 → 2009年 18,214人

では、実際どうなのか。統計表の数字の上では、全体で、この約15年で現在受聖餐者は、確かに約2割ぐらい減ってきています。

日本聖公会の11教区

北海道	北海道
東北	青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島
北関東	茨城、栃木、群馬、埼玉
東京	東京
横浜	神奈川、千葉、静岡、山梨
中部	愛知、岐阜、長野、新潟
京都	京都府、滋賀、福井、大阪(一部)、和歌山、奈良、三重、石川、富山
大阪	大阪府、兵庫(一部)
神戸	兵庫、岡山、広島、山口、島根、鳥取、愛媛、香川、高知、徳島
九州	福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、宮崎、大分
沖縄	沖縄

しかし、日本聖公会は11の教区から成っていて、それぞれの範囲も1都道(府)県だけの教区から10県抱える教区があったり、受聖餐者数も429人から4545人というようにかなり教区によって幅がある集まりです。教区別の現状はどうなっているのでしょうか？

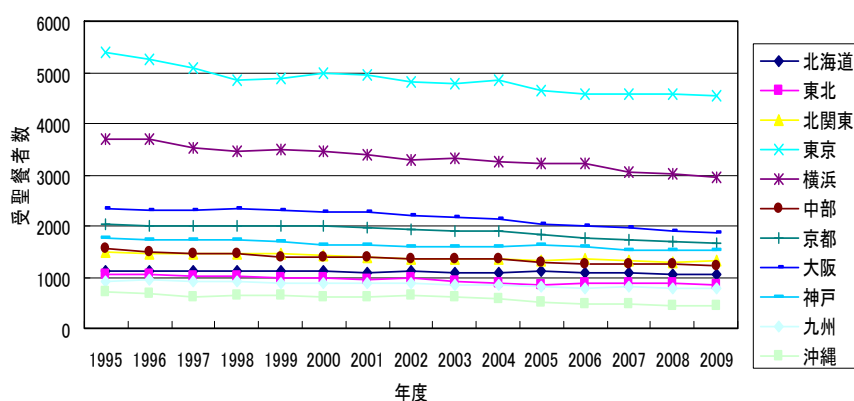
現在受聖餐者数

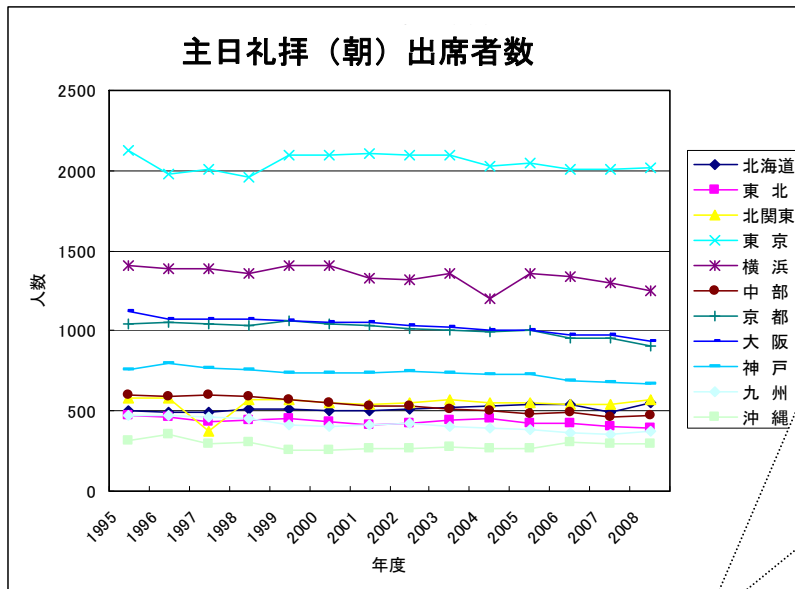
1 教区 429～4545 人

教区によってかなり幅があります。

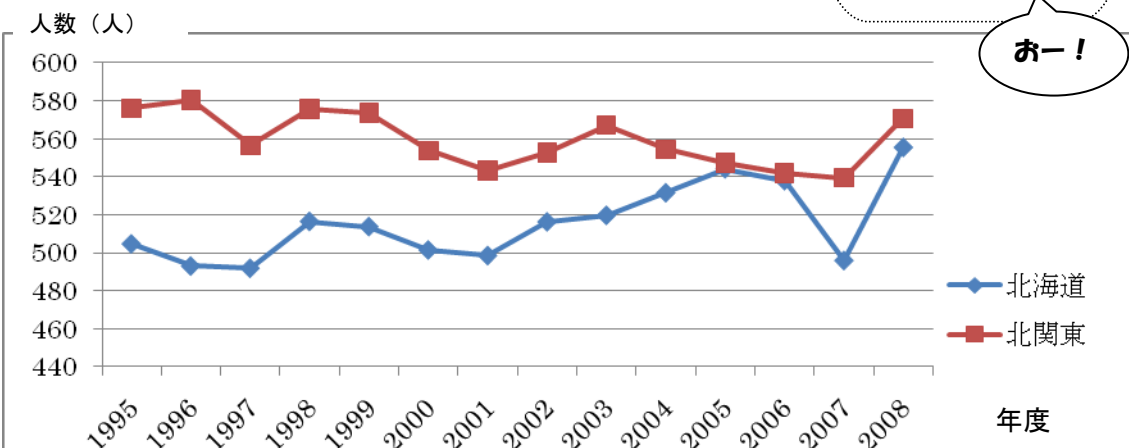
各教区でも割合は違いますが、やはり全体的に減少傾向でした。

教区別 現在受聖餐者数の推移 1996～2009 年

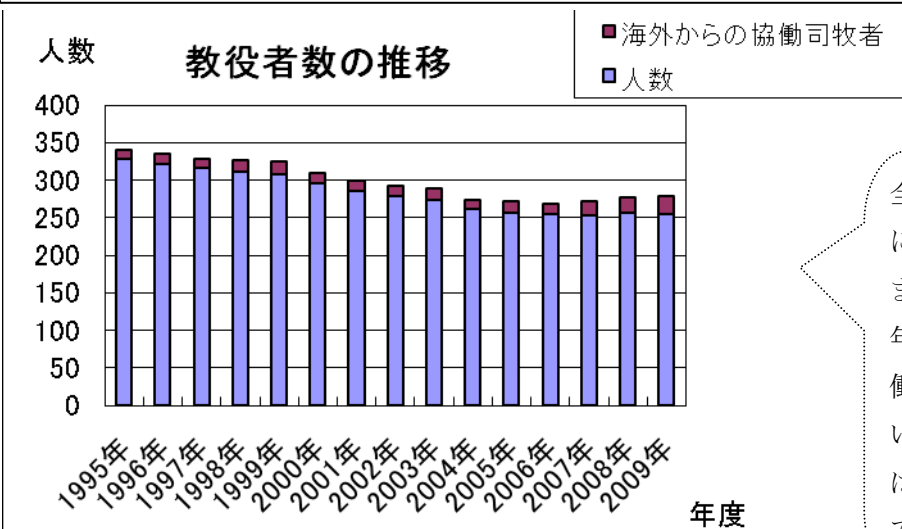




より実的な数字を、
ということで毎主日
の朝の礼拝の出席者
数を調べてみました。
全体的に少なくはな
っていているんで
すが、その中で、15
年前とほとんど変わ
っていないか、上が
っている教区が 2 教区
ありました。ぜひその
教区の人に話を聞いて
みたいですね。



* プレ発表時には、北関東教区の 1997 年の値が極端に下がっていましたが、その後数値の誤りを確認し、訂正済み



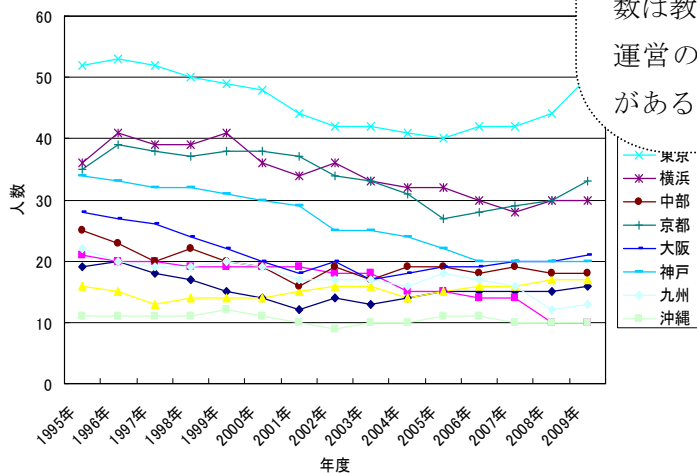
全体的には確かに減ってきていますが、ここ数年、海外からの協働司牧者(色の濃いところ)の割合は少しずつ増えてきています。

なぜ教役者が不足するのか

- ・ 聖職志願者の不足
- ・ ストレスによる休職者の増加
- ・ 施設の多さ

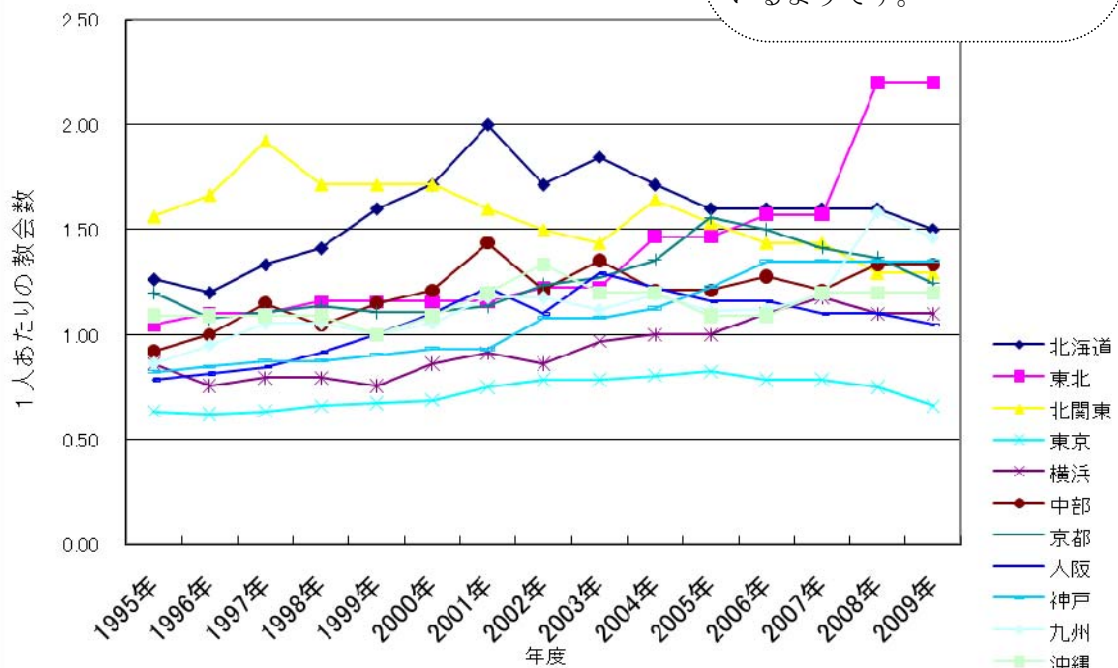
「宣教担当者と常置委員長らの集い」(09年1月)では、聖職になりたい人が減っていること、人は減っていくのに施設の管理運営の仕事は増え、牧師は精神的にも身体的にもストレスが高じ休職を余儀なくされることに・・・という悪循環が指摘されていました。もっとも施設数は教区によってかなり差があり、施設運営の大変さ以外にもいろいろな要因があるかと思います。

教区別教役者数の推移



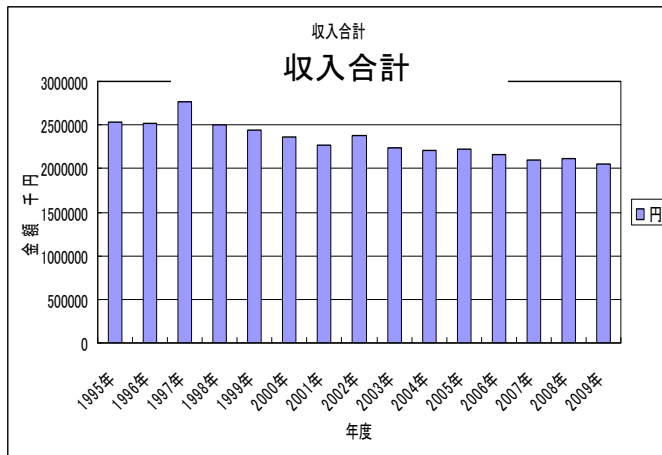
では、現職の教役者一人当たりの教会数(礼拝堂・伝道所を含まず)は、どうでしょうか。教区の事情が異なるので単純に比較もできませんが、ざっと見たところでは、特に、最近2年間の東北教区の教役者一人あたりの負担が他教区とくらべて大きくなってきているようです。

現職教役者1人あたりの教会数の推移



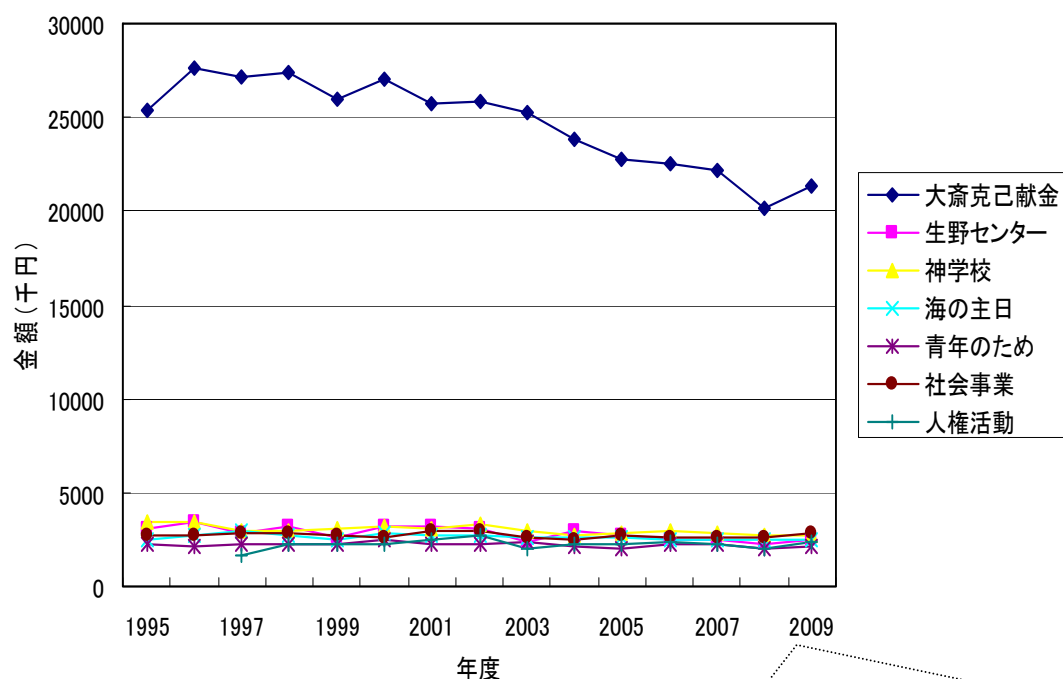
教役者の
絶対数の不足 → 無牧の教会の増加
↓
献金の減少
(東北教区 財政担当者)

「3つの質問」回答によると、とにかく「教役者の絶対数が足りない」ということと、「教役者が減ること」で、献金も減っていくということが指摘されました。

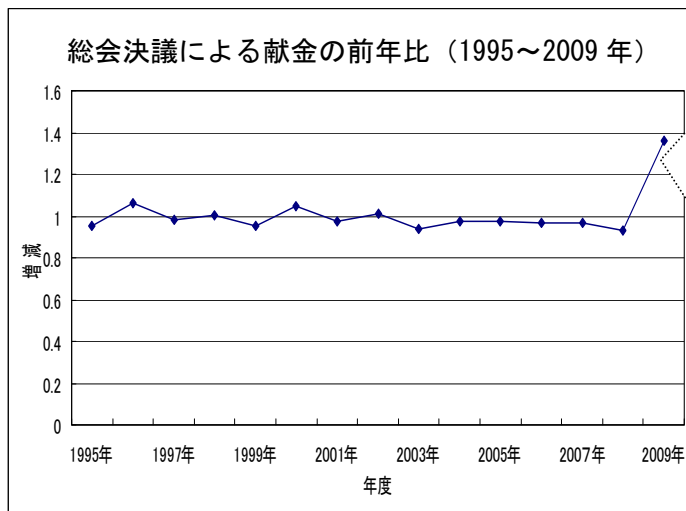


日本聖公会全体の収入も減っています。

総会決議による目的別の献金額 (1995～2010 年)

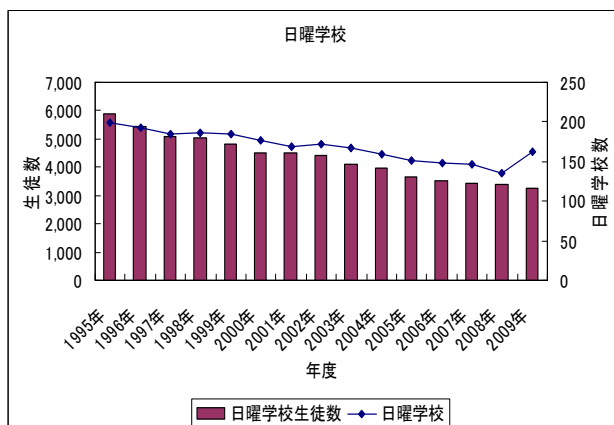


ですが大齋克己献金以外の献金（「海の主日」や「人権活動のため」など、総会決議によるもの）額は、ここ 15 年そんなに大きくは変わっていないように思います。



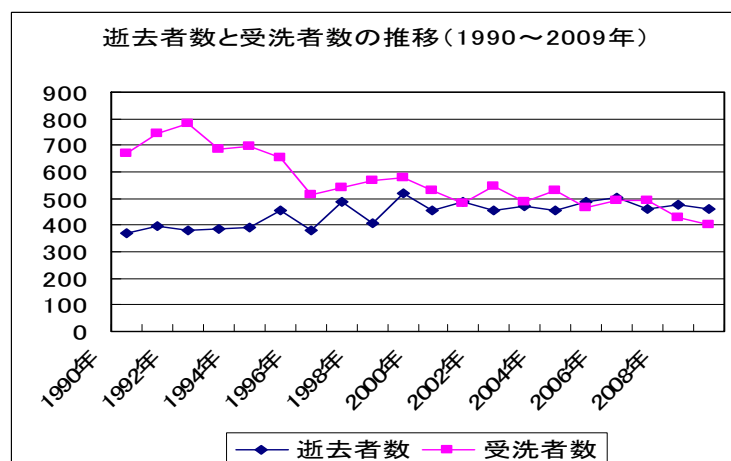
献金の前年比で見ると、これもそんなに大きく変わっていないわけではないようです。

（2009 年度は、150 周年記念献金が入っているのですこだけ高い値になっています）



さて、日曜学校はどうなっているのでしょうか。

少子化、それに子ども自身が塾や習い事で忙しい、・・・日曜学校に来る子どもの数が減り続けています。



信徒の高齢化に伴って逝去者の数が増えています。

一方、受洗者数は減っています。

（参照：『2008 年度特別学期のまとめ～日本聖公会の宣教を問い直す』（聖公会神学院 発行）

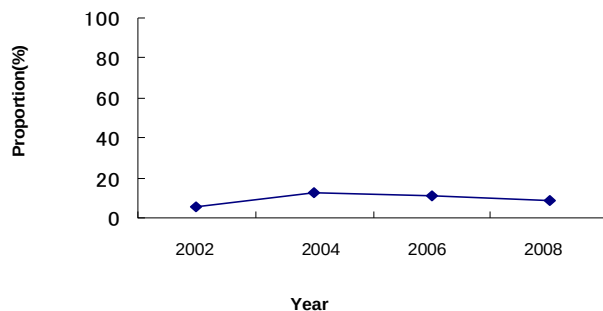
聖職候補生の数（その年の聖職養成のための教育課程にある者の数）の教区間の差

統計表によると 1995 年～2009 年の間で、
（のべ人数で）一桁～52 人の開きがあります。

長期間、聖職志願者を出していない、聖職を自前で養成していくのがかなり困難な状況の教区もあります。聖職養成の問題は、管区全体で考える必要があるのではないのでしょうか？

給与格差が障壁となっている可能性があるのではないのでしょうか？

総会代議員における女性の割合



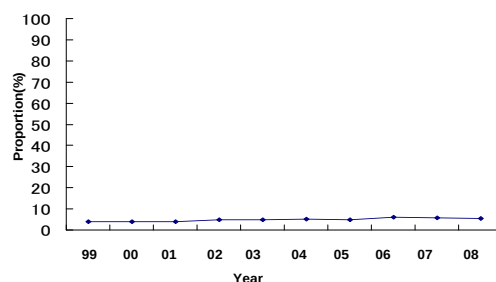
その他、日本聖公会の特徴の一つは、信徒の約 6 割以上が女性であるにも関わらず、意思決定機関には女性がほとんどいないこと。

性別によって役割が限定される傾向が強い集団と言えるかも知れませんが、さてそれを変えていく方法は？

意思決定機関における女性の割合

- ・ 総会で議決権を有する人（信徒代議員・主教代議員）
総数 55 名のうち女性は 5 名
- ・ 59 総会期 常議員総数
9 名のうち女性が 1 → 3 名へ！
- ・ 管区担当者／諸委員会委員総数 224 名のうち
女性は 41 名（58 総会期）
- ・ 主事総数 6 名 うち女性は 0

女性の司祭の割合



災害への募金

2006年 1304万円

パキスタン北部地震、スマトラ島沖及びジャワ島中部地震

2007年 236万円 この年は大きな災害はなし

2008年 908.2万円

ミャンマー サイクロン、中国四川省地震、ペルー地震

2009年 320万円

2010年 1069.5万円

フィリピン台風(2009年発生、サモア諸島地震・津波、
インドネシアスマトラ島沖地震(2009年発生)、チリ地震、
ハイチ地震、中国青海省地震

人的貢献・・・パキスタン北部地震の際の聖路加国際病院・日本
聖公会・パキスタン教会ペシャワール教区の協働で医師団を1ヶ月
半にわたり、派遣

その他、何か特徴的な数字はないかと探したところ、渉外主事からは「自然災害に対する日本聖公会信徒の配慮」が挙げられました。災害が発生すると、必ずと言っていいほど管区に募金の問合せがあるそうです。管区では、災害の規模に応じて募金を呼びかけるかどうかを判断されるそうですが、呼びかけ無しでも送金して下さる教会・施設・学校があると言うことです。

「日本は、台風・地震・津波等の被害を受けていてよく事情がわかっているからでしょうが、災害発生の際に献金していただく気持ちはとても強く、またその気持ちは大層貴重です。献金だけでなく人的援助ができればもっと貢献できるのですが、パキスタン北部地震の際の、聖路加国際病院・日本聖公会・パキスタン教会ペシャワール教区の協働で医師団を 1.5 ヶ月に亘り現地に派遣したこと以外は、残念ながら何もできていません。これは実現が難しいですが今後の課題です。」(渉外主事のお話)ということでした。

開発途上国の開発支援活動では、米国聖公会や USPG や CMS (*) による英国聖公会などが積極的で、最近このような活動に関する情報をアングリカン・コミュニオンで共有し、協働していこうということを目的としたネットワーク、GARDA (Global Anglican Relief and Development Alliance (仮称)) が発足しつつあるそうです。

(*) 英国を拠点とする宣教団体

日本は世界のアングリカン・コミュニオンの中でも、かなり小さな管区のうちのひとつだと思いますが、まだまだできることはありそうです。

地域に働く教会、海外への支援／協働を行っているグループなど

ファミリーサポート聖十字広場／ちらいおつ遊び塾／ひかりおもちゃ図書館／東京教区聖公会生野センターと共に歩む会／聖公会野宿者支援活動渋谷／浅草日曜給食活動／寿町プロジェクト／国際こども学校／愛知聖ルカセンター／聖公会生野センター／ぶどうのいえ(3ヶ所)／カパティラン／アルディナウペポ／リグリマ／サラーム・パレスティナ／バーンサバイ共の会／学生寮、国際寮等・・・

ではこれで最後です。日本聖公会が現在この社会に対してどのような働きをしているか、という視点から探してみました。たとえばかつては、「社会福祉施設や幼稚園、学校などの教育施設が何か所」と数えることができたことが、今、働きが多様化していて分類するのも難しい感じです。ここに挙げているものも、全体の働きのうちの一部に過ぎません。

浅草の給食活動では、毎日曜日、約 500 食を野宿者の方々に提供しているそうです。移住労働者の問題に取り組むグループもあります。NGO と協働するグループや、現地の女性たちと企画段階から一緒に自立支援を考え、市民グループとも連携していこうとしているグループもあります。

以上です。ご紹介してきたものは、全体のうちの一部に過ぎませんし、しかもあまり実行委員会内で分かち合える時間ありませんでしたので、発表担当者の視点からだけの偏ったものかも知れませんが、私たちの教会の現状を考えるきっかけの一つと見ていただければ、ありがたいと思います。ご質問をお願いします。

質問：「ありがとうございました。いろいろデータ出していただきましたが、今、見せてもらったデータはみんな過去のものですよね。でもしっかりと見ていかなくてはいけないのは、これからのこと考えるのには、これからどうなるんだろう、というデータなんだろうと思います。例えば、うちの教区では 10 年前、信徒数の年齢別統計を出して、グラフを作りました。簡単に申し上げると、要は 10 年前で 50 歳～70 歳代で大きな山ができています。今どうなっているか、60 歳～80 歳で大きな山がある。そうすると 10 年後どうなっているのでしょうか。非常におそろしいですね。そこから下の年齢はどうか。急激に下がっている。過去の数字を見ることはいいんです。でも 10 年後、私たちの教会、教区、管区がどうなっ

ているのか、というのを見るのは、そういうデータではなく、これからどうなるか、ということだと思うんですね。これに献金額、どうなんですか、ということです。ざっくりと見た感じですが、60 歳以上の方、年金があるからでしょうか、あるいは献金に対する考え方が今の現役世代の方と考えが違うんでしょうか。多額の献金をくださってるんですね。この方々がいったい、いつまでくれるのか。私は、実はこういうところを、危機意識を持って考えていかなくちやならんと思っています。実は、こういう話を今日出していただけるのではないかと期待してきた次第です。」

→そのようなことも含めて、午後の分科会などで考えていってほしいと思います。

<榊茂樹先生からのコメント>

「今、見せていただいて、教会の詳しい事情は存知あげないのでわかりませんが、ただこう見てみますと、一つは女性の方ですね。今日も私の話の中でそういうことを話させてもらったと思いますが、そこがこれからは非常に重要になってくるのではないかと思います。もともと女性の信者さんが多い、ということでした。意思決定や聖職の方に女性が増えてくると、信者の方からのニーズがくみとりやすくなる、ということはあるのではないかと。そういう点から見ると、女性のそういう数値はまだまだ低いな、という印象です。あと、収入源ということですね。信者の方からの献金がベースになっているということですが、これからは、何らかの手立てが要る、ということでは、今までと違う方法、そこをお考えになる必要があるのかな、というふうに思いました。」

お詫びと訂正

（※この他、当日のフロアからのご質問として 2010 年 7 月に参加者に事前資料としてお送りした「レポート1 改訂版」の資料5「現在受聖餐者・教役者・教会数の比率一人当たりの教会数」の数値に関して間違いの可能性のご指摘をいただきました。後日、調べましたところ、元の資料からの数字転記間違いを確認しました。本報告書、<資料4>レポート1、2のうちの「レポート1」の資料5に、訂正済みのものを掲載しています。お詫びして訂正いたします。ご指摘ありがとうございました。）

*グラフの根拠となっている数値に関しては管区統計表（日本聖公会ホームページ）をご覧ください。もしくは発表者木川田 punku@mb.aikis.or.jp までお問い合わせください。

9. 現場からの発題

(8月19日 13:00~14:00)

□ 現場からの声 (1)

「老いる」とは、どのようなことでしょうか。また私たちはそれにどのように向き合えばいいのでしょうか。長年、高齢者介護の現場に関わってこられた鈴木さんのお話を伺い、「ウエルフェア」ということについて考えます。



講師 鈴木育三執事（北関東教区）

プロフィール：日本聖公会北関東教区 執事
社会福祉法人新生会常務理事
地域生活支援センター所長

1. 当日のご講演から

プレ宣教協議会全体会発題—福祉の現場から

2010. 8.19

すずきいくぞう

今、私がここに立たせていただいておりますのは、過日、横浜教区と北関東教区の合同教役者の会がありまして、「高齢者社会」—「教会と福祉」というテーマで発題を求められました。その折、司会の武藤司祭から、プレ宣教協議会に出席することを要請されました。私の発題は30分と時間が限られていますので、準備しました資料を、後ほどゆっくりご参照いただければと思います。

先ほど濱生司祭と昼食をとりながら、「懐かしいですね」と声をかけあいました。何が懐かしいかといいますと『明日の教会を築く会』の運動に話がおよびました。皆さんの中でご存知の方がいましたらうれしいのですが……。半数以上の方が知っておられますね。もう30年以上はたっているかと思います。宣教のために信徒、教役者が元気を出して協働しようというのがそのプログラムのねらいだったと思います。聞くところによると、海外からの宣教資金が打ち止めになるため、今後自立するためにどうするのかということが大きな課題になっていました。海外教会に依存した教会でなく、自立した信仰、言い換えれば成熟した信仰共同体を築こうというのが趣旨だったと思います。当時私は神学校に勤務しておりましたので、沖縄教区、大阪教区、九州教区等々、各教区を訪問する機会が与えられ、信徒使徒職の働きの重要さに気づかされました。

今、そのスピリットはどのように継承されているのでしょうか。検証する必要があると思います。当時、主教会はじめ日本聖公会をあげて、あれだけのプロジェクトを展開したのですから……。自立した共同体として、かつ成熟した信仰共同体として歩みだ

そうと色々な試みをした時代でした。今、宣教 150 年を迎えたのを期に、新たに宣教的使命を確認していこうというのが、今回の宣教協議会の趣旨ではないかと思います。

午前中（私は遅れてきましたが、）日本の社会・経済的状況、日本聖公会の統計的な数値が紹介されました。私の発題は、福祉の現場からというので、あえて言いますが、余人に替えがたいお一人おひとりの高齢者の方々は、その人固有の人生を日々生きておられます。そのお一人おひとりの姿に接していると、計量化、数量化することのできない厳粛なものを感じます。

神戸の方でしたか、10 年前の統計数字と今の数字を比較なさり、10 歳年をとってもその方たちが圧倒的に教会のコアになっているとの報告がありました。高齢化する教会の現状を訴えられたのだと思います。この世的には定年がありますけれど、教会の信仰生活には定年はありませんから、報告を聞いておもわず嬉しくなりました。

高齢者の方々と日々ご一緒にいますと、今日こうしていただけることが、ものすごく不思議なことに気づかされます。一人ひとりのいのちの不思議さ、尊さを大事にしているのが教会の姿だと思うんです。しかし、今日は受聖餐者が何人と数字を書くわけでしょう。最後は、あの統計数字になって出てくるわけですね。

たった一人でもいいんです。お一人おひとりの方の信仰を大事に出来る共同体が教会でしょう。今日そのお一人の方と出会えている、ご一緒にできている喜びを味わいあえる場こそが、信仰の共同体・教会の姿ではないでしょうか。

私は、イエス様は一人ひとりを愛しむ方ではないかと思っていますのです。お前は、いくらあるか？いくら献金するのか、とは言わなかったのではないのでしょうか。多く献金した富める人と、貧しいやもめの話もありますね。心からの感謝の表れが、教会財政を支えている根源だと思っています。

先ほど植松主教様が「T さんはお元気でいらっしゃるか」と尋ねてくださいました。T さんは、戦時中はフィリピンに看護師として派遣され、帰国後看護師として尽くされナイチンゲール記章を受けられた方です。90 歳を超えられた T さんにとって今大事なのは、教会に行って聖餐に与ることなんですね。「昨日、教会でお会いしましたね」と声をかけると、「あらそうだったかしら」といいます。T さんは、日々信仰によって生かされているのです。T さんにとって、ナイチンゲール記章をもらったことよりも聖餐に与れることが命なのです。「霊の糧」spiritual foods によって生かされているのです。

教会にご高齢の方が増えたことは、けっしてネガティブなことではありません。Wonderful なことなのです。そのすばらしいことに気がついていない。高齢者は年金生活者だから献金が減ったとか、とかく数字に目がいくからネガティブになるのです。教会を訪れてくる一人の高齢者の存在は、信仰共同体にとっては大切な宝なんです。高齢になられた先輩方の信仰生活、スピリチュアリティから学ぶことはたくさんあります。私たちが、信仰生活を共有する先輩たちとご一緒にできることは私たちの宝です、と申し上げたい。そこには献金の額では計れない尊いものがあるのです。私たちは悲観するこ

とはないのです。教会はスピリチュアルな宝を得ているということを大切にしたいですね。信仰生活には、定年はないんですから、一人ひとりが生涯現役ですね。この世界的な統計によれば「少子高齢化」という秤があります。しかし、我々は別な秤、つまり「神様のソロバン」を持っていることを現場から発信したいと思います。なんでそんなことをあえて言うかということ、高齢者お一人おひとりにとって、今日の一日一日がどんなに貴重な一日であるかということ、実感するからなんです。高齢者のスピリチュアリティについては、お配りした資料をご参照いただければと思います。

今、新生会で、「関東キリスト教教育連盟」が主催している高校生たちのヴォランティア・キャンプが行われています。高齢者と若者が出会う体験をします。若者と高齢者の間には、大きな壁がありそうに見えるでしょうが、実は「いのち」には古いも新しいもない。いつも「いのち」は新鮮です。100歳の方と18歳の若者とが、互いに「いのちの最前線」で出会うのです。今、ここでの「いのち」の出会いから、感動が生まれます。

今ここに65歳以上の方はどのくらいいるのでしょうか。若干ですね。国が2000年から導入した介護保険制度によると、65歳以上の方が被保険者になります。40歳以上の方はたくさんいらっしゃる。これからますます増大する高齢者の方々を、社会で支えようとする制度です。これを私たちは、「親孝行の社会化」と称しています。要支援1・2、要介護1から5まで、受けられる介護量が計量化されています。介護保険は、当初「公的介護保険」と称されていましたが、いつしか「公的」という表現は消えました。本来、国は国民の生活に対して責任があるのです。「憲法第25条第1項：すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。第2項：国は、すべての生活面について社会福祉、社会保障および公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」と明記されています。社会福祉は国家責任であるにもかかわらず、「自己責任」という言葉がはやり、介護保険も市場化され、福祉の商品化、介護サービスのビジネス化が進みました。市場原理を支える競争原理は、著しい非人間的数量化、計量化をもたらし、挙句の果てが、「グローバル・スタンダード」という不可解な怪物に飲み込まれました。

市場原理、競争原理に支配された息苦しいほど多忙な現代社会は、深刻な社会病理を産み出しています。「いのちの電話」に関わりあっているから言うものではありませんが、ここ10年余、毎年3万人という自死者があります。これは個人の問題でなく、社会的経済的格差だけでなく、社会環境の悪化、非人間化した人間関係の歪みが引き起こしている現実です。生きる場を失った人々が、死を選んでしまわざるをえない、悲しむべき出来事が生起しています。これは、教会にとっても重要な関心領域ですね。私たちの交わりが、一人ひとりを生かしあう交わりになっているかどうか。信仰の共同体が、人の痛み、苦しみ、思いを共有している生きる場になっているか、問われています。

私たちはよく「忙しいから」という言葉を使います。教会は、ビジネス (busyness) の場所ではありません。忙しくさせられているのではなく、実は忙しくしているのですが……。私たちは、サマリヤ人のたとえに登場する「律法学者・祭司」のように、面

倒くさいことは嫌ですから、忙しいことを理由に傷ついた人から逃げてしまいがちです。私たちは立ち留まって、その人の思いに耳を傾けることが求められているのですが・・・。

レジュメに「老いの旅路に同伴すること」と、ちょっとカッコいい表題をつけたんですが、人生の老いの旅路は厳しいものです。人生の旅 (travel) は、苦労 (travail) でいっぱいです。旅人がくたびれた時、危機に遭遇した時に、心安んじられる居場所を提供するのが、教会の使命だろうと思っています。

大郷博さん(日本聖公会の休職中の司祭)が、飛騨の高山で「アブラムの里」というのをやっています。過日、私どもの新生会で講演をしていただきました。「宿」を提供するのが教会の役割という発想をしておられます。人生の旅路に疲れた人に、「宿」を提供してしばらくくつろいでもらう。そういう話を聞きました。

話が少しずれますが、今朝、新幹線こだまに乗ってまいりました。新横浜で停車しましたから、ひょいと窓の外を見ると、「ほぐし」と書いてある看板が目に入りました。店の名前は「一休」というのです。肩の凝った人が行くのでしょうか。なかなかこった看板でしょう。教会にきたら前の人の肩を揉みあいましょうということを言っているではありませんよ。ただ礼拝に出席して、教会を出たら肩がコリコリになっては、「もうコリゴリだ」となってしまいますからね。そういった教会でない教会になってほしいな一と思いますね。凝り固まった魂を軟らかく豊かにするスピリチュアル・ケアこそ、教会の大事なミニストリーだと思います。(蛇足ですが、ラテン語で心・心を「コル」というのだそうです。) 教会は肩の重荷が降ろせる場所になることを提案したいと思います。

教会の使命は、旅人を温かくもてなすこと「ホスピタリティ」、神と人々に仕えること「サーバントシップ」ですね。「Hospitality」、これはヘンリー・ナウエンから学んだことですが、パンはホスチア、ホーストです。教会には、旅人をもてなす宿屋の主人がいます。主イエスは、「究極のホスト」(The HOST)です。私たちは、主に招かれたゲストです。教役者は、minister(より小さい者＝召使)と言われます。主の御用にあずかるのは、十字架を背負っているのでストレスがかかります。しかし、ありがたいことに、その労苦を共有して下さる信徒さんがたくさんおられると私は信じています。

最後に、関東キリスト教育同盟の青年たちのワークキャンプの主題歌を紹介します。

「私をお使いください」

主よ、今日一日、貧しい人や病んでいる人を助けるために
わたしの手をお望みでしたら 今日、わたしのこの手をお使いください。

主よ、今日一日、友を求める人々を訪れるために
わたしの足をお望みでしたら 今日、わたしのこの足をお使いください。

主よ、今日一日、優しいことばに飢えている人々と語り合うため、
わたしの声をお望みでしたら 今日、わたしのこの声をお使いください。

主よ、今日一日、人は人であるゆえに　どんな人をも愛するために、
わたしの心をお望みでしたら　今日、わたしのこの心をお使いください。
また、マザー・テレサは、次のような言葉を残しています。

“We can do no great things, only small things with great love.”

「私たちは、たいそうな事は出来ないけれど、ささやかな事を大いなる愛を込めてすることは出来ます」と。

オマケに、もうひとつ小さな物語を紹介します。

「ハチドリ計画」

南米のアンデス地方に住む先住民族に伝わるお話です。

あるとき森が燃えていました。森の生き物たちは、われ先にと逃げていきました。
でもクリキンディという名のハチドリだけは行ったり来たり　くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んでは、火の上に落としていきます。

動物たちがそれを見て「そんなことをしていったい何になるんだ」と言って笑います。
クリキンディはこう答えました。「私は私に出来ることをしているの」と。

私たちは大きいとか、小さいとかと統計で比較することは出来ますが、教会は、小さな一滴の水のしずくを提供できる場であればよいと思います。

2. レジューメ

プレ宣教協議会：高齢化社会を迎えて　レジューメ

2010 . 8. 19

高齢者への配慮の業　―老いの旅路に同伴すること

北関東教区　執事

社会福祉法人新生会　常務理事

地域生活支援センター所長　鈴木育三

●老いの日にも見放さず、わたしに力が尽きても、捨て去らないでください。

(詩篇 71 編 9 節)

●わたしが老いて白髪になっても　神よ、どうか捨て去らないでください。御腕の業を、力強い御業をきたるべき世代に語り伝えさせてください。

(詩篇 71 編 18 節)

●わたしに聞け、ヤコブの家よ、イスラエルの家の残りの者よ、共に。あなたたちは生まれた時から負われ、胎を出た時から担われてきた。同じように、わたしはあなたたちの老い

る日まで、白髪になるまで、背負って行こう。わたしはあなたたちを造った。わたしが担い、背負い、救い出す。
(イザヤ書第 46 章 3~4 節)

- はっきり言うておく。あなたは、若い(ネオテース)ときは自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとる(ゲラセース)と、両手を伸ばして他のひとに帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。(ヨハネによる福音書 21 章 18 節)

ここ急速に進む高齢化にたいして、多くの人の関心が高齢者の介護に向けられています。人類の歴史と共に「老い」は、必然でありました。生きることそれ自体が、両義性を持つように、老いもまた両義性を内包しています。「老い」を経験する人自身にとっても、またそのケアに携わる人にとっても身体的・心理的・社会的・精神的・霊的な次元において、人間実存として「老い」に真向うことは人生の重要な課題です。

高齢者の介護が社会問題化されてくるにともなって、「老いの介護」は、ますます計量化・数量化され、人生の成就としての「老い」それ自体の実存的意味性が希薄化させられているように思えます。一人ひとりがそのひと個有の独自の人生の主人公として、老いる道程を生きぬいている厳粛な事実を捨象し、＜老人問題＞一般として論じることには妙に反撥を覚えます。

老いの過程は、一日一日を生き生きと生きるいのち(Living Life)そのものとして、名詞として語られるものではなく、動詞として受容されるべきものです。老いゆくことは、G. マルセルが指摘するように「超問題(meta - problem)的な神秘(mystery)」に属するものであります。一人ひとりの他にかけがえの無い人生の神秘・いのちの不思議さを見失ってはならないと思います。

高齢期は、実存的成熟の季節です。個々人の人格を統合し、個々人の人生という芸術作品の最後の仕上げをするために、その独自性—オリジナリティを磨きあげ、その人個有の人生のモニュメントを完成させる時期として重要です。私たちはだれもが個有の人生の成就に向かっているこの世の旅人です。この世に生を受けたその日から最後の時を迎えるまで、「自分自身」という重荷を負って人生の旅を続けています。その道程はその人自身が歩みきらなければなりません。

人生の最後の旅路は厳しいものです。幾度も葛藤の山坂を越えながら、等身大の自己自身になってゆきます。「老いる」を生きる過程で、心理・身体・社会的な喪失の体験を自己受容していくことは大変な仕事です。「自己自身」という重荷を誰かが代わって背負っていくわけにはいきません。「失禁」や「認知症」が始まる喪失の危機に直面する時期は辛いものです。「こんな自分になっちゃって、いっそ死んでしまいたい。」、「はやくお迎えがきてほしい」こんな言葉が呟かれます。「自分自身」が重荷に感じられる葛藤の深まる時です。自分自身と闘っているこのときにこそ、今を生きる、在るがままを抱くケア(配慮の業)が必要となります。

死に直面した人々の臨床にかかわり続けた E. キューブラー・ロス女史は、遺稿というべき

著書『ライフ・レッスン』において、「わたしのなかには名状しがたい、なにか定常的なものがあり、それは消え失せることも、加齢や病気や環境によって変わることもない。生まれながらにそなわっていて、それとともに生き、ともに死んでいく、正真正銘の自分というものがある。わたしとは、ワンダ（驚異に）フル（満ちた）わたしであるというほかはないのだ。病気とたたかっている人をみていると、自分とはなにかを知るためには、ほんものの自己ではないものをすべて脱ぎ棄てなければならないということがわかってくる。」と、人間存在の尊厳性を不変の自己同一性（その人自身）にみえています。ロス女史は、自身の困難な状況のもとにあって、けっして患者ではなく、最期まで自己自身で在り続けました。

古今東西「老い」は尊敬されるべきものであると同時に、「死」を予測させるものであり、拒否されてもきました。「老い」は「生と死」をむすぶ鍵として、ライフ・サイクル（いのちの環）において重要な位置が与えられてきました。実践神学の第一人者、H. ニューウェンは” AGING—The Fulfillment of Life” と題する著書で次のようにのべています。

「年齢をかさねることは、ほかのなににもましてすべての人間が共有する経験である。その経験は、人間の共同体の上にかかっている。歳をとっていくことは人間にとってじつに深い経験であり、小児期と青年期、そして成年期と老年期という不自然な区分を壊していく。歳をとることはほんとうに恵みにみちいて、約束されたとおりのわたしたちは人生の宝をつぎつぎ発見していく。老いはあなたを絶望に追い込むものではなく、かえって希望をもたらしてくれるものである。老いることは徐々に朽ち果てることではなく、しだいに成熟すること、また、忍ばねばならない運命ではなく、歓迎すべき好機であると、わたしたちは信じている。それゆえわたしたちは、老いた人と世話をしていく人とが、年齢をかさねるという共通の経験で結ばれつつ、互いを発見しあっていけるように、願っている。そのなかで人は癒され、また新しい生の歩みをはじめることができるのだから」（邦訳『闇への道、光への道』）と。

私は、高齢者の生活施設で多くの高齢者の方々と出会う機会を与えられてきました。過日も、105歳の誕生日を迎えたTさんを囲んでささやかな誕生会が開かれました。7歳のひ孫さんが、リクライニングの車椅子に横たわる曾祖母の耳元に「大叔母ちゃん、おたんじょうびおめでとう」と、大きな声で呼びかけました。Tさんは、目をしばたたかせました。100年の隔てを越えて「いのち」と「いのち」が触れ合いました。「いのち」は、いつも新鮮です。「古いのち」、「新しいのち」といったものではありません。今日の「いのち」が、四世代を超えて互いに出会いました。それは、祝福にみちたひとときとなりました。

人生の悲喜交々を味わい尽くしたMさんは、身体的には、前立腺癌が進行していましたが、「俺はもう欲はないな。ただ残された日々を美しく歩きたい」と語ってくれました。来し方を回想するかのように、これから訪れる時を見極めようとするかのように、その瞳は静かに落ち着いていました。多くを語らず、さながら瞑想に耽っているかのように思えるMさんの姿から、老いた人の宝はその精神の静謐にあることを知らされました。Mさんは

自分に与えられた日々を彼なりに精いっぱい生きぬきました。

ヘルマン・ヘッセは、著書『人は成熟するにつれて若くなる』で、老いていく人のありかたについて、次のように語りかけています。「私たち自身の絵本を注意深くめぐりながら、あの疾駆と狂奔から逃れて『ヴィータ・コンテンプラティヴァ』(vita contemplative)、すなわち『静観の生活』に到達したことが、どんなにすばらしく、価値のあることであるかに驚愕するのである」と。年をとっていくことは神聖な使命であり、死ぬことを学ぶことは価値の高い働きであることを、知らしめています。

101歳を越えて、ホームに入られたYさんは、長い修道生活を過ごされてきました。お部屋を訪問すると、いつも感謝のことばをのべられます。すべてを委ねきったその姿に触れると、不思議なやすらぎをあたえられます。「こうしてなにもできなくなっても、修道院にいても、いなくても、どこにいても、いつも神様は共にいますからね。」と、今在ることにこころを開いておられます。ふつと、ヘルマン・ホイベルス神父の『最上の業』の詩の一節が聞こえてくるような想いにとらわれます。

「神は最後にいちばんよい仕事を残してくださる。

それは祈りだ。手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。

愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために。」

「配慮の業」にたずさわる者にとって、帰還すべき魂の故郷を信じて今日一日を生きる先輩達の姿に、精神の静謐を見出だすことは決して困難なことではありません。

ロス女史は、『死—成長の最終段階』Omegaの章で、「死を恐れることはない。わたしたちが苦しむのは身体の終焉ではない。むしろわたしたちの関心は、生き生きと生きること、霊的な死(the spiritual death)から内面の自己を解放することに向けられなければならない。」と、一日一日を精一杯自分らしく生き抜くことの大切さ、やがて迎える人生の成長の最終ステージとしての「死」をも突き抜ける魂(spirit)の永遠性を語りかけています。

今日「介護」という行為は経済効率原理にからめとられてしまい、人生の成就のときとしての「老い」の重要性は希薄化されてしまっています。ケアを市場化する時代状況にあっても、高齢者のケアは、「いのちへの配慮」の業であると同時に、やがて訪れる「たましいの故郷への回帰の時」にそなえる準備の時期でもあります。

日本最初の特別養護老人ホームの医師として尽くされ多くの高齢者の臨終に立ち会ってきた林富美子女史は、「老いるとは脱皮することです。苦悩を通り抜けて成長することです。物質的な世界、自己中心的な世界からぬけ出して、宇宙の中に移行することなのです。待っておられる神様のところに飛び立つことなのです。そこでは死はおわりではなく、新しい出発です。」と、しずかに語りかけています。

<過去をたしかめる>「老人には、それぞれに生きて来た長い長い生涯があります。積み重ねて来た生活の記録があります。それは、織り上げた布のように、たぐりよせると、さまざまな記憶や人生模様が甦って来ます。感動をもって織ったところは生き生きと輝き、

あるところはぼんやりとしていますが、そんな中で、父と母に愛された幼い頃の、あの純粹な愛の記憶のなんとはっきりと刻みつけられていることでしょうか。今年 99 歳、やがて白寿の祝いを迎える A 老人の話題には、よくご両親のことが出てきます。その、父と母の話をしている時の顔は、いかにも幸せそうで、安らいだ笑顔をみせます。私はこの百歳の老人をみていると、人間にとって愛されるということが、どんなに大切なものであるかを教えられます。『人生というものは、毎日自分のはく息、吸う息のその糸で、織物を織り上げていくようなものだ』と言った人がありますが、幼い頃のなつかしい思い出、青年期の美しい花模様と、さまざまな人生模様を織り込んだその長い布を前に、ある時、ふとその手を止める時が来ます。その時が『老い』といわれる時なのでしょう。

そして、振り返ってその長い織物に目をむけてたしかめてみると、折々の人生模様は昨日のここのように甦ってくるのです。その一つ一つを、たとえそれが、道端で拾った石ころのような小さい思い出であっても、現在におきかえて眺めたり、撫でたり、さすったりしながら、自分の生きてきた過去をたしかめてみるのです。」(林富美子(文) 土田セイ(絵) 『夕暮れになっても光はある』—特養寮母の介護絵日記、小綬鶏社 PP. 5〜7)

今日では、親しい家族に囲まれて別れの言葉を交わし合いつつ旅立ちの時を迎えることは、大変難しくなりました。

次のナンシー・ウッドが、紹介するネイティヴ・アメリカンの古老の詩は、自然と共生する単純文化人のファミリーのライフ・サイクルにおいて、老いた先達が次の世代に「いのちのバトン」をリレーしていく様子を温かく歌い上げています。

「今日は死ぬのにもってこいの日だ。
生きているものすべてが、わたしと呼吸を合わせている。
すべての声が、わたしの中で合唱している。
すべての美が、わたしの目の中で休もうとしてやって来た。
あらゆる悪い考えは、わたしから立ち去っていった。
今日は死ぬのにもってこいの日だ。
わたしの土地は、わたしを静かに取り巻いている。
わたしの畑は、もう耕されることはない。
わたしの家は、笑い声に満ちている。
子どもたちは、うちに帰ってきた。
そう、今日は死ぬのにもってこいの日だ。」

私たちは、老いの旅路に同伴するものとして「魂への配慮の業」(Spiritual Care) の必要性が増していると思います。人生の秋の影が深まるにつれて、年老人々の訴えは願望を超えてしだいに祈りに近くなります。なすべき業が少なくなればなる程に、存在は祈り

に変わります。やがて、私たちの交わす会話は終わり、全てが祈りとなるときがきます。看護師がバイタル・サインを注意深く読むように、私たちは年老いた人々のかたわらで沈黙のなかにスピリチュアルな語りかけを心の耳で聞き分けなければなりません。

家族から「グランマ、グランマ」と愛され 94 歳で亡くなられた Y さんは、高齢者ホームで過された日々を次のように記していました。「顧みれば、まことに長い人生でありました。それはまた、楽しい人生でした。多くのよい友人たちに恵まれ、よい知己を得、掘っても掘り尽くせない宝の山の上に今立っています。惜しみなく与えられた愛情と援助の手がいつも私の周囲にはありました。いつも静かに一日の業を終えた時、『わがめぐみ、汝にたれり』との神の御聲を聴くこのごろです」と。老いる過程は、天の家庭への帰還の道程でもあります。

私たちのホームの「旅立ちの部屋」には、サラ・G. ストックの詩が掲げてあります。

「家には一人を減じたり、楽しき団欒は破れたり、

愛する顔いつもの席に見えぬぞ悲しき

さはれ、天に一人を増しぬ

清められ救はれ、全うせられしもの一人を

家には一人を減じたり、帰るを迎ふる聲ひとつ聞こえずなりぬ

往くを送る言ひとつ消え失せぬ

さはれ、遙か彼方に我らの往くを待ちつゝ

天に一人を増しぬ

家に一人を増しぬ、分かるゝこと断えてなき家に

一人も失なはるゝことなかるべき家に

主イエスよ、天の家庭に君とともに座すべき席を

我らすべてにも与へたまえ」

1999 年、『国際高齢者年』において、国連は、5 つの原則①Independence、②Participation ③Care、④Self-Fulfillment、⑤Dignity を提示し、17 点について具体的な指標を掲げました。

また、「国際高齢者年」に向けて、教皇庁信徒評議会が発布した『高齢者の尊厳と使命』(The Dignity of Older People and Their Mission in the Church and in the World) は、21 世紀の高齢化社会に対して、聖書的・牧会的指針を与えています。その一部を引用します。

『高齢期の意味と価値』——人生のもっとも完成された一つのビジョン——

わたしたちは、多忙、苛立ち、不安、ストレスに悩まされて暮らしています。そして、そういうことに惑わされ、気を取られて、人間の召命や尊厳、その生き方にかかわる根本的な問題を忘れてしまいます。高齢期は、人間が単純さを取り戻し、観想に向う時期です。

高齢者が生きてきた情感的、倫理的、宗教的価値は、社会、家族、人々の均衡に欠かせない要素です。これらの価値は、責任感から友情まで、権力の追求否定から思慮深さ、忍耐にまで、何かを生み出すことを重んじる内面生活から、平和の構築にまで及びます。

高齢者は、＜存在すること＞が、＜行動すること＞や＜所有すること＞にまさる、と得心します。高齢期のカリスマから得られる利益を真に理解すれば、人間社会はよりよいものになるでしょう。」と、多次元にわたって、高齢者への牧会的視点に立脚してメッセージを送っています。

10. 分科会報告

(各分科会 8 月 19 日 14:30～17:00 全体会 19:30～21:00)

当日の進行／報告 木川田道子

私たちの教会の課題を明らかにしていくために、今回 10 のテーマに沿って話し合う分科会の時間を設けました。この 10 のテーマは、report1 と 2、宣教協議会開催を決議したここ 2 回の管区総会の議論、前回 1995 年の宣教協議会及びその後の 15 年間の振り返り、昨年の宣教 150 年記念礼拝の経験、諸委員会の活動の経緯などを踏まえ、実行委員会で話し合いながらカテゴライズしたものです。参加者の方々には予め参加したいテーマを第 3 希望までお尋ねした上で、実行委員会側でなるべく教区、性別、年齢、立場などが偏らないように 7、8 人からなるグループに分けました。

(このカテゴライズやグループ分けについては、それぞれの分科会や振り返りで、もう少し別の提示の可能性があったのではないかと—たとえば「なぜ“子どもと青年”がひと括りに?」、「“正義と平和”はすべての事に関わってくるし、管区でも同じ委員会がある。そことの関連は?」などの意見もいただきました。また、“まだプレなのに”課題を細かく分け過ぎることで根本的な問いを見失う危うさについても、ご指摘いただきました。確かにさまざまな括り方の可能性はありましたし、当然ここから漏れている課題もあります。優先テーマを絞った経過の説明不足はお詫びするとともに、開き直って書くことをお許しいただけるならば、今のプロセスとしては、私たちは、山のようにある問題をさまざまな切り口からの一時的な仮の仕分けと整理を繰り返すことで、ようやく中心的な課題に近寄っていつている段階なのだと思います。)

この時間の目標としては、1. まずはこのテーマにはどういう課題があるかということ、自分自身や教会、教区を通して関わっている働き、経験の中からできるだけ挙げてもらうこと、そして、2. できればその課題の解決に向けたリソースや具体的なアイディアや提言、向かうべき方向性、教会がそれに向けてどのように働きができるのか、さらに、3. 2012 年にみんなが共通の土台として持てるような宣教のビジョンを出していくためには、どのようなプロセスを歩んでいけばいいのか、といったことを分かち合い、話し合っていたきたい、としました。

分科会終了後、各グループから話し合われた内容の報告を実行委員会で一晩かけてまとめた後、3 日目の全体会での協議、その後に行った再度の分科会での話し合いを経て、最終的なまとめとしました。1 日目に 2 時間半、2 日目に 1 時間、合わせて 3 時間半という短い時間での話し合いでしたが、互いの悩みや思いに共感したり、その中から、教会の今後につながるアイディアやキーワードを発見したり、促しや励ましをもらえたのではないかと思います。これらを、これからの日々の宣教のアイディアや 2 年後の宣教協議会、またその後の展望に、どのようにつなげていけるのかまだわかりませんが、今後も実行委員会と各教会、教区がつながりあいながら、そのことを一緒に考えていけたらと思います。この時間の進行、記録の労を引き受けてくださった皆様、ご協力ありがとうございました。

□それぞれの分科会で分かち合われたこと

＜分かち合われたこと＞については、各分科会からの記録と 2 日目夜の全体会での報告を元に編集部がまとめたものであり、内容が正確に反映されていない部分もあるかも知れません。

＜話し合ったことのまとめ＞については、各分科会で分かち合われた内容を一旦実行委員会が取りまとめ、3 日目の全体会での意見交換を経て、再度、分科会で訂正、確認をしていただいた文章そのままを掲載しています。

第 1 分科会 『貧困』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞

日本経済の低迷によって、失業率が高まっています。老若男女を問わず野宿生活者が増え、また安価な労働力として移住労働者の雇用が増えています。また世界的に見ても高い日本のひとり親家庭の貧困率や男女間賃金格差と言った問題も続いています。野宿生活者や移住労働者への支援なども含め貧困をめぐるさまざまな取り組みについて分かち合います。



＜分かち合われたこと＞

＊ホームレス支援（炊き出しや、住居提供を通じての自立支援など）を行っている教会の働きについて。

＜東京＞野宿者支援活動・渋谷（渋谷聖ミカエル教会）、日曜給食活動（浅草聖ヨハネ教会）、＜名古屋＞NPO ささしま共生会・笹島キリスト教連絡会（名古屋聖マルコ教会）、＜九州＞NPO 法人 北九州ホームレス支援機構への参加など。

＊「子どもの貧困」が深刻である。しかし、見ようとしなければ見えないことが「子どもの貧困」の特徴ではないだろうか？保育園、幼稚園のある教会にできることは、多くあるのではないか。

＊カナダでは、約 20 年前頃から教会がシングルマザーの支援センターの一つとしての働きもするようになったと聞く。教会がどうしてここにあるのか、何をするのか、ということ突き詰めていった結果ではないだろうか。

日本の教会は、地域から浮き上がっていないだろうか？

教会は現実の社会を見てきただろうか？

教会のメンバーにとってのみの場所になっていないだろうか？

□「実現可能で」「継続できることで」「聖公会らしい」働きとして具体的にはどんなことができるだろうか？・・・たとえば・・・

・「なんでも相談にのります。」・・・たとえば月 2 回でも、教会に張り紙をするのはどうだろう。子ども、シングルマザー、職を失った人の貧困について、相談窓口の紹介やガイ

ドブック、パンフレット（例えば “路上からできる生活申請ガイド”、“子どもの権利手帳” など）などを教会に置いたりするのは？

- ・子どもの貧困→保育園のある教会に。
- ・「思春期の子どもをもつ親が話せる場所」「自死家族が話せる場所」「高齢化する引きこもりのことを話せる場所」・・・教会がみんなが寄っていける場所になれないだろうか？
- ・情報の共有
- ・地域の悩みを教会の悩みにする
- ・教会の構造を変えられないだろうか。（教役者のみに任せない。信徒の働き＝有償スタッフを置く）

＜話し合ったことのまとめ＞

「貧困」は主イエスご自身がずっと取り組まれてきた問題であり、私たちにとっても今なお深刻で避けては通れない問題です。社会的には、経済的格差により貧困にあえぐ多くの家庭が生み出され、見えにくい「子どもの貧困」へとつながっています。経済的貧困は、精神性、関係性の貧困にもつながります。私たちの身近で具体的な例としても、主日の昼食代を支払えない、また月約献金をささげることの出来ない人々がいます。

教会は、私たちの社会が、どういう状況にあるのか理解を深め、地域の悩みを教会の悩みとする姿勢が求められています。

～日ごとの糧を今日もお与えください～

第2分科会 『高齢化社会を迎えて』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞

65 歳以上の高齢者の割合は、2015 年に日本の総人口の 25.2%になると言われています。教会の信徒の高齢化も同じです。ご高齢の信徒たちだけの教会も少なくありません。ご高齢の方たちが豊かに用いられる教会とは何か、地域社会のご高齢の方たちに寄り添う教会とは何か、探ります。

＜分かち合われたこと＞

□高齢化に伴って起こっているさまざまなこと

- ・礼拝堂が2階にあって昇降が辛い・・・（教会建設当時は若かった）。
- ・礼拝出席などでの車の送迎をととても遠慮する。
- ・高齢で独居の母親を教会の人が訪問してくれるのがありがたい。励まされている。
- ・高齢の老婦人の信徒の方が孤独死していた。教会全体が大きな悲しみとショックを受けた・・・。
- ・特に地方の小さな教会では、高齢者だけで礼拝を守っておられるところがいくつもある。
- ・送迎など高齢信徒のサポートをしていると、それまで来られることのなかったご家族と一緒に礼拝出席する場面を見ることも。自分がいる間は高齢の方をサポートし続けた

い。・・・でも、自分が高齢になったときにお世話してもらえるだろうか？

・未信徒の高齢者に対して教会は本当に門戸を開いているだろうか？

□「老いる」とは・・・

- ・人は生まれた時から老いる。それはまったく自然なことである。
- ・礼拝に若い人がいないと嘆くけれども、信仰篤い高齢者が確かにおられる。
- ・年をとらないと解らないことがたくさんあると思う。老いることはみ言葉の理解を深め、より味わえるようになることではないか。

□地域で教会の担うべきこと、出来ることは何だろう？

- ・教会はSOSをキャッチするアンテナを持たなくてはいけない。
- ・みんな困った時は遠慮なく発信するべき。
- ・信徒の高齢化に伴うサポートの仕方について学ぶ必要がある。
- ・「最期るとき」「永遠の命」について高齢者にはわかりやすい言葉で伝えたい。
- ・牧会は「パストラル・ケア」という。介護は「ケア」という。「ケア」は教会に起因している。
- ・でも心配するのは牧師だけの仕事ではない。ケアを牧師だけでなく横に波紋のように広げる必要がある。
- ・高齢化がテーマではあるけれど、教会の中は一人一人を大切に思っている。その交わりの中にいるから私たちは兄弟姉妹、家族である。
- ・何より祈りが大切。身体的にどうにもならなくなっても、その時こそ祈りがあると思う。
- ・自分で自分を慈しめば、他の人を慈しむことができる。
- ・「高齢である→何もできない」と気おくれしながらいるのではなく、かけがえのない大切な「あなた」である。高齢者だからと引け目を感じることはない。

「あなたの人生の主人公はあなた。」

高齢者だけではない、私たちは召されるまで宣教の担い手。

牧師は入院見舞
に行けるけど、
これお坊さんだ
と行きにくい
(笑)



祭壇の後ろに納骨堂があ
る教会もある。そうして
とり行われる礼拝が羨ま
しい・・・。

＜話し合ったことのまとめ＞

一般に、信徒の高齢化が、教会の将来への悲観として語られています。しかし、それはまったく違うと思います。高齢者と呼ばれる信徒の存在は教会の宝です。長い人生を過ごす中で、そして多くの試練をくぐり抜けて鍛えられてきた信仰は、わたしたちの模範です。その宝から、わたしたちは豊かな信仰を学び、そして継承してゆくことができます。老いは寂しさ、苦しみを生じさせるものでもあります。

教会は、そのような状況に置かれたすべての方々に、神の家族として関わり、共に祈り、高齢者の方の困難を共に担う教会となる必要があります。そしてまた、高齢者も大切な宣教の担い手の一人です。わたしたち自身、天に召されるまで現役の宣教の業の担い手であり、最後まで信仰を証し、救いを伝え続けるのです。

第3分科会 『正義と平和』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞

人権、環境、平和…、正義と平和の課題はさまざまですが、神さまが創られたすべてのいのちを阻むものは何か、私たちはどこに立ち、どこに向かおうとしているのか確認します。



＜分かち合われたこと＞

【管区での“正義と平和”に関する取り組みの経緯】

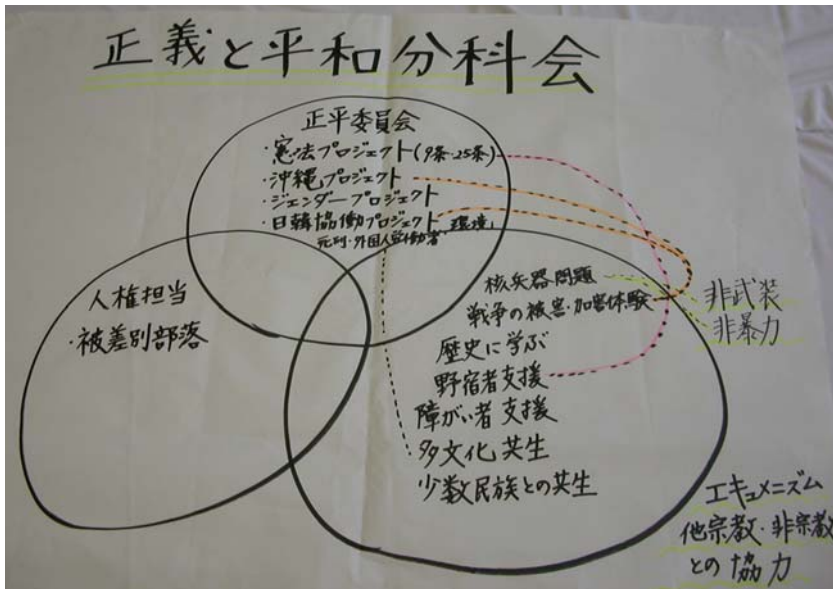
- ・管区の編成により6委員会（「天皇制・靖国問題委員会」、「部落差別問題委員会」、「正義と平和」「日韓協働」、「学生・青年運動」「訓練計画」）が統合され、現在の正義と平和委員会になった経緯について。

【正義と平和をめぐるさまざまな状況】

- ・イラク戦争で使われた大量の劣化ウラン弾使用の影響への将来的な影響への懸念。
- ・日本は、平和憲法、非武装のもとで憲法9条を実現していくという立場を明確にしなければならない。・・・しかし「非武装」という考えがなかなか受け入れられない現実。
- ・核抑止力という考えはさらに権力を暴力化していくだけ。核兵器を使ったら地球はだめになるのだからなおさら暴力を使わないという非暴力へ向かわなければならないと思う。
- ・私たちは次の世代に大事なことを伝えていかななくてはならない。・・・「自分たちの税金を投与して沖縄に基地を置き、アジアの平和を守ろうとしている私たち」の問題、「原爆のおかげで戦争を早期に終結できたというアメリカ人青年の意見」、「従軍慰安婦と天皇制の問題」、「靖国」「軍隊は国を守らないこと」・・・日本人（特に若い人）にきちんと近現代史を教えていかなければならないと思う。その中で国際社会での日本、すべきことが見えてくると思う。

【教会の働き】

- ・2007年にソウルで世界平和大会が開催され、朝鮮半島における平和と統一にむけてTOP I K（日韓協働プロジェクト）がスタート。北朝鮮の冬は寒いので、練炭を送り、栄養支援としてミルクを送っている。
- ・環境問題・・・全聖公会の宣教の5つの指標“自然物の保全”がきっかけになり、今年



の総会で世界環境デーに近い主日に特別なお祈りを献げる活動等も行っている。

- ・教会に障がいを持つ人がいらした時にすぐに対応できるようにしたい。手話や筆記ができる人などを組織的に育てていけないものか。
- ・神戸教区では学生に平和礼拝のことを説

明している。次に伝えていく人を増やしていく活動が大切。

- ・神戸教区ではカトリックと協働で炊き出しをしている。中高生が手伝いに来てくれる。子どもたちが変わったと思う。地域の人からも食材の提供があったり、ボランティアの演奏会があったりと、これまで持っていたイメージとは違う広がりを感じている。
- ・その他「ふるさとの家」（九州／福岡）、NPO法人「ささしま共生会」（中部／名古屋）の働きなどが分かち合われた。
- ・移住労働者、無国籍の人たちが置き去りにされている状況があるのでは。
 - ・・・伝道とは、やさしさを伝えていくことではないだろうか。

<話し合ったことのまとめ>

わたしたちは、主イエスの「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイ 26:52）という平和の福音に聞き、すべての暴力に反対します。とくに最大の暴力である戦争に反対し、核兵器廃絶のために祈り、行動することが大切だと考えます。また、戦争体験者の声に耳を傾け、それを次世代に語り継ぐことが必要です。

一人ひとりの命と尊厳が守られることが、正義と平和の課題の中心です。その課題は多様であり、他の諸課題とも重なり合っています。憲法 9 条を守ることは、アジアをはじめとする世界における平和への寄与であり、それは、日韓両国の関係、朝鮮半島における分断状況に対する責任、在日韓国・朝鮮人との真の共生とも関わっています。朝鮮半島・中

国をはじめとする戦争被害者に対する日本の責任はまだ終わっていません。過去の歴史の中で戦争その他の犠牲となり、今もなお米軍基地の存在によって生活を脅かされている沖縄の人々の苦しみをどのように共に担うことができるかも大きな課題です。

また、わたしたちの文化・習慣の中でつくられてきた偏見や思いこみによる差別の中垣を乗り越え、取り除くことも大切な課題です。聖公会の5つの宣教の指標の5番目にも示されているように、地球環境を守る働きも焦眉の課題となっています。

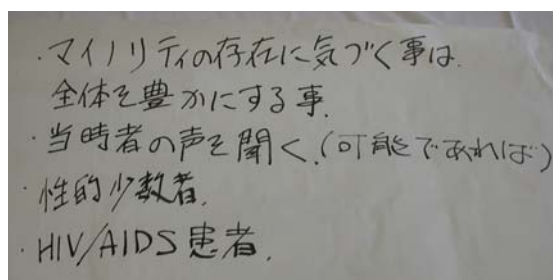
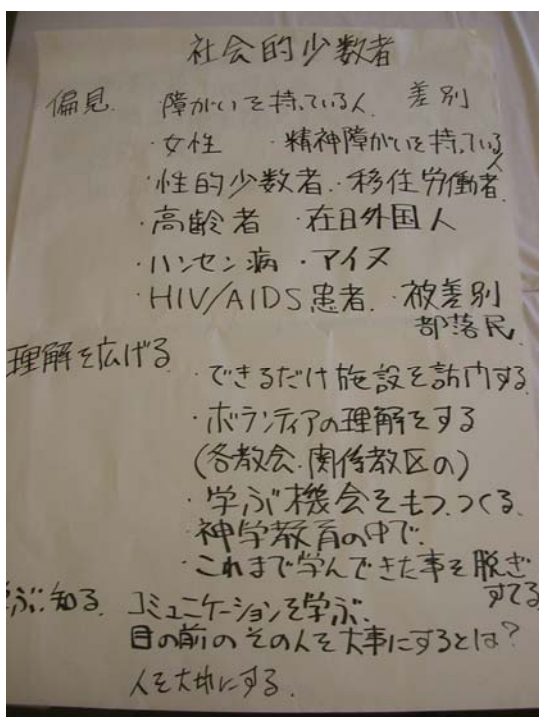
これらのことに取り組む上で、APJN（全聖公会正義と平和ネットワーク）をはじめとする世界的ネットワークとの連携、エキキュメニカルな取り組み、宗教や信条を超えた他団体との協力が必要なことも覚えたいと思います。

第4分科会 『社会的少数者』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞
一人ひとりのありのままの存在が尊ばれる社会をつくりだすために、私たち一人ひとりの「ちがひ」のすばらしさに気づきたいと思います。

＜分かち合われたこと＞

□まず「社会的少数者」とは誰なのか？ということについて、それぞれの参加者の経験や関わっている働きから考えてみました。少数者とは文字通り“多数でない”ということと共に、「女性」「高齢者」のように数的には多数であっても、社会の偏見、差別意識、固定観念などによって周縁に置かれ、本来持っている力を奪われ、あるいは小さくされた人もその中に含まれるのではないだろうか？と話し合いました。



□ではなぜ偏見があるのか？→「知らない」ということが大きいのではないかな？

□では理解を広げていくためにどうすればいいのかな？

→施設を訪問し、ボランティア体験などを通して学び、知る機会を持つこと。また（可

能であれば）当事者の声を聴くことや、聖書の学びなおし（引用する箇所によって偏見を助長されてきた点もあるのでは？「捉え直し」や聖書学の進歩から学び、神学教育の中でこれまで学んできたことを一旦脱ぎ捨てる必要があるものもあるのでは？）

・コミュニケーションの方法を学ぶことが必要ではないか。

この世界の多様性に気づくことは私たち全体が豊かにされることでもあることを確認しました。（このほか夜の分科会報告では、性的少数者からの相談に関する現状～教会を訪れたい性的少数者がいても、偏見がそれを妨げており、差別を恐れて教会に来られない人も多いことについて、その他 AIDS/HIV 感染者を支援する取り組みなども報告されました）

＜話し合ったことのまとめ＞

社会的少数者は、社会の偏見の中におかれています。精神やからだに障がいを持つ人、知的障がい者、性的少数者、移住労働者、在日外国人、アイヌ民族、被差別部落出身者、元ハンセン病患者、HIV 感染者（AIDS 患者）など。またその他にも、社会のなかで弱い立場におかれている高齢者、女性、子どもたちも大切にされず、居場所を奪われています。教会の中にも、すでに知って理解しているようでいて、知らなかったり理解していなかったりすることが多々あります。そのため、そのようなことがなくなるように、教会は社会的少数者との出会いの場を作る必要があります。また教会の交わりの中に、社会的少数者も信仰生活をともに送っています。彼／彼女らも神の家族の一員です。教会は、彼／彼女らの苦しみを理解し、彼／彼女らの苦しみと、そして喜びを、分かち合っていくことが求められます。

＜2012 年宣教協議会に向けて＞

教会は、こういうことをして過ごしていきたいと思います。

教区・教会に関係する諸施設への訪問・ボランティア活動

学ぶ機会をもつ（神学校・教会）

当事者の声に耳を傾ける

今回、一番、希望者が多かった分科会です。

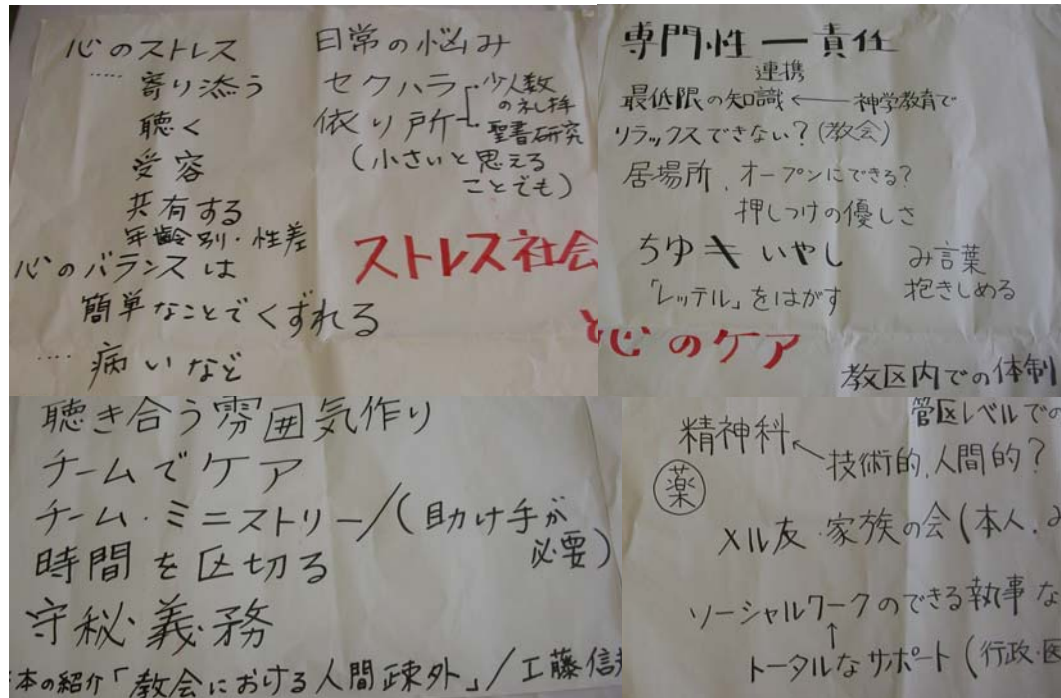
第 5 分科会 『ストレス社会と心のケア』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞

日本ではここ 10 年以上、年間 3 万人以上の人が自死によって亡くなっています。またさまざまなストレスから不安感やうつ症状に悩む人も増えています。教会は命の問題にどのように関わり、悩む人にどう寄り添って来られたのでしょうか。そしてこのような現代社会に向けて、どのようなメッセージを発信することができるのでしょうか。



＜分かち合われたこと＞



＜教会の現状について＞

- ・教会には子どもから高齢者まで幅広い年齢層の人、またさまざまな悩み、病を抱えて苦しんでいる人が訪れる。特にここ数年、心の病氣を持つ人、ストレスを抱えて教会に来られる人が大勢いる。
- ・その人に寄り添うことが大事だと思う。でも現実には、教会で一緒にその人の悩みを共有することは難しいことがある。実践するのは難しい。時には、教会の方が症状が悪くなるということもある。
→体験がない人にはその悩み、つらさを想像しがたい、ということがある。精神的、身体的な障がいへの偏見もある。「相性」の問題も。
- ・牧師は牧師で、一人で問題を抱えこんでしまい、結果的には中途半端にしか関わっていないことも多い。その中で牧師自身もストレスを抱え込んでしまう。牧師だけで対応することの限界を感じている。
- ・重荷をすべて自分で背負い込んでしまっても結局、中途半端になり、長くは続かない。「専門家」、「医者」でない私たちがすべてのことに関われるわけでもないし、「善意」だけで関われるものでもないと思う。
(「治癒」に関わるのが医者で、「癒し」に関わるのが教会では?) →助け手が必要。
- ・教会はみんながリラックスできる「居場所」になっているだろうか?

ハラスメント防止のための相談のシステムは作ったが、実際機能するのだろうか?

- ・ どうすれば悩みを共有できるだろうか？
 - ・ 牧師が一人で対処している現状を教会としてどう受け止めていけるだろうか？
 - ・ ケースによっては、放っておいてあげることも大切なときもある。
 - ・ 1人の対応よりチームで対応することが必要なこともある。
 - ・ 苦しんでいる人に寄り添う（一人ではないことを伝える）ことは大事。
 - ・ 必要な時には専門家に委ねる。
 - ・ 教会として今までさまざまに対応してきた事例を、牧師間で共有する。
- ・ 「さまざまな申請の手続きなどソーシャルワークのできる」「守秘義務を守れる」執事の可能性を考えたい。
- ・ 牧師だけでやるのではなく、「自分も重荷を負った一人である」として、信徒もその働きを担うべきではないだろうか。教会としてチームで対応する如果能够できれば。

<話し合ったことのまとめ>

現代は、ストレス社会と言われています。このような社会の中で心の病におかされる人々も増えています。このグループのテーマは、根底では、他のカテゴリーと深く重なり合っているものが少なくありません。教会は、自らの内にも、ストレスを抱えている人を含みながらも、ストレスにさらされ、心の病を負って苦しんでいる人々を支える場となろうとしてきましたし、これからもそうありたいと願っています。そのために、その人たちの苦しみを理解し、受け入れ、彼らが自分自身でいられる場となろうとしています。しかし同時に、教会は、心の病を直接治すことができる場というのではなく、自らの限界を見つめつつも、できるだけ、彼らと共に寄り添おうとする姿勢を大切にしたいと思います。私たちの限界を知り、専門家のサポートを求めながら、私たちにできることが何かを探りつつ、具体的にその実践をしてゆきたいと思います。

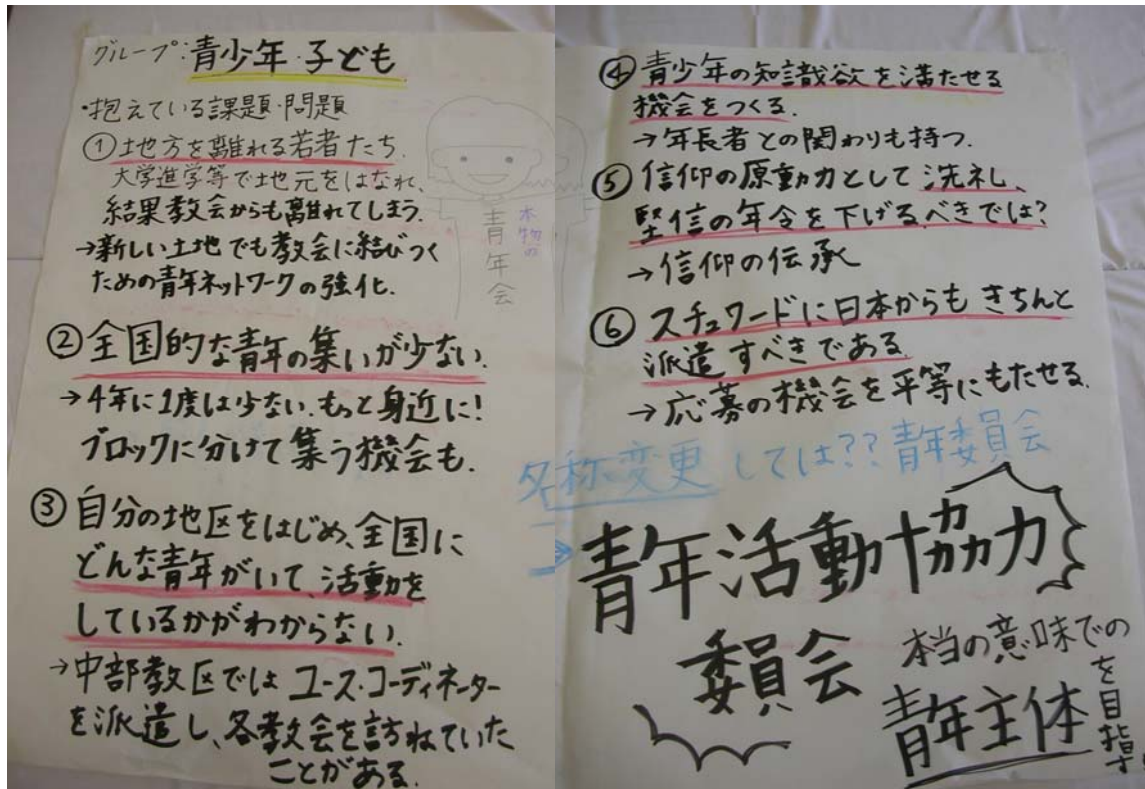
第6分科会 『青少年・子ども』

<このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から>

若い人たちや子どもたちに、教会は何を伝えているでしょうか。青年や子どもたちの豊かな交わりを実践している教会から学びます。

“青少年・子ども”・・・この分科会に
した目的は？ 対象、意味が曖昧では？





<分かち合われたこと>

□抱えている課題について

1. 青年会の認知度が低い。中高生が少ない。集いの機会、参加者の少なさ
2. 幼稚園の閉鎖によって、教会につながる子どもがいらない。→教会が持っている楽しさを上手に伝えることができていない。
3. 日曜学校から教会につながらない。
4. 自発的に教会に来る子どもが少ない。ほとんどゼロ。どう集めるか。
5. 集う場所（スペース）がない教会もある。
6. 新しい人にも輪に入ってもらえる方法はないか?
7. 地方を離れていってしまう
→地方に行く人たちがその土地に結びつける方法は?
→行った先での地方出身者の同窓会を作るのは?
青年ネットワークづくり。
8. 元気な青年会にするには? 少ない人数でも楽しい会にしたい。
9. 日曜学校のあり方が明確でない。
10. 部活との関係



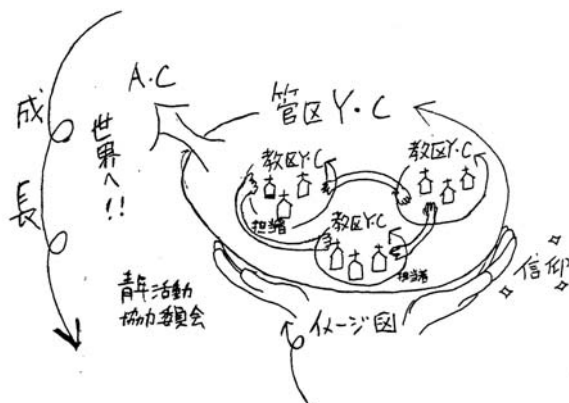
11. 全国的な集いをもっと多くできないか？——集いをもっと身近に。4年に1回は少ない。
 →全国的には難しくても、ブロックに分けて集う機会をつくる。
 →全国大会の前に集まり、全国大会に声を届ける。委員会で先に決めるのではなく、生の青年たちの意見も取り入れてもらえないか？
 青年会の名称を変えて「青年活動協力委員会」としてはどうか？
12. どんな青年がいるのかわからない。
 →中部ではユース・コーディネーターを設け、各教会をまわっていた。役割分担を意識する。
13. 青年に働きかける魅力とは？
14. 青少年内での後世教育
 →管区にユース・コーディネーターというポジションをおく。
 青年ネットワークを強化するべき。仕組みを変えるべき？
15. 青年は「いない」のではなく「来ない」のでは？
16. 信仰の原動力として、洗礼・堅信の年齢を下げるべきでは？
17. 神様のことを伝えられていないのでは？
18. 青少年の知識欲を満たせる場をもつことも大切では？ 年長者たちとの関わり。
19. どの世代に合わせるべきかわからない。
20. 国際会議のスチュワードに日本からもきちんと派遣すべきである。

<話し合ったことのまとめ>

・子ども

1. 福音の種まき

- ・ 子どもの「知りたい」に応える。
- ・ 堅信（初陪餐）の時期を検討。



・青年

1. ネットワーク作り

ユース・コーディネーター制度（システム）

目的

- ・ 現場の現状把握
- ・ 新しい青年との結びつき
- ・ 経験の場をすべての青年に平等（スチュワード等）

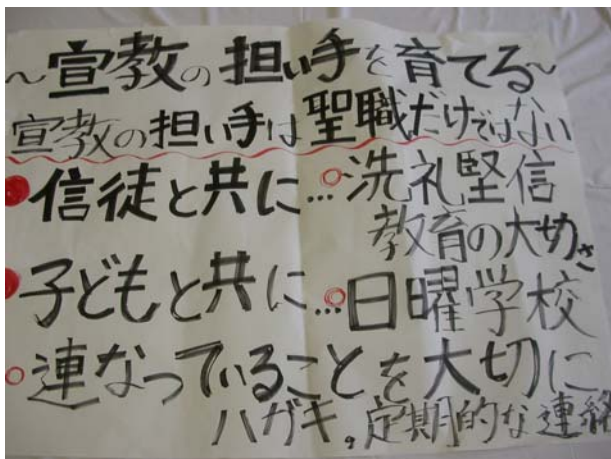
2. 全国的な青年の集いの場を増やす

- ・ 4年に1度ではなく、もっと頻繁に。
- ・ “青年委員会” 名称変更→ “青年活動協力委員会”
- ・ 青年全体で動きやすくなるために。

第7分科会 『宣教の担い手を育てる』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞

聖職者も信徒も共に宣教の担い手です。担い手たちの養成について話し合ひましょう。



＜分かち合われたこと＞

「担い手」をめぐって
“宣教の担い手” とは
誰だろうか？

- ・ 宣教は聖職だけが担うものでもないのでは。そもそも聖職だけですべてを担っていくのは無理。「担い手」をもっと広い意味で考えたい。
- ・ でも信徒の側に「信徒はお客さん」というイメージはないだろうか？

・・・信徒の側に牧師先生に“やっていただく”意識があるのでは。

- ・ 今これだけ教会につながる人が減っている。
- ・ 新しい人が2, 3回教会に来て後も続かない。
心の病いや悩みを持って教会を訪れる人は多いと思う。

つながることを
大事に考えたい

→受け入れるための知識も必要。

- ・日曜学校には来ている、そこから大人の礼拝へとつながっていない。
→・日曜学校はできないが、月1回、土曜日の午後、子ども学校をやっている。近隣の子どもたちに声をかけると応答がある。「教会が待っています」と伝わるような声かけ、連絡、案内は大事。
- ・「こどもの礼拝」を行っている。→子どもと一緒にできることをしていきたい。
- ・信徒一人ひとりが担い手であり、大事に見守りながら育てていきたい、自分もそのように育てられた。

○聖職養成の現場～教区・神学校の現場から

- ・志願者が高齢化している。高齢の方が学ぶのは大変な面もあるが、すでに通常のことになりつつある。
- ・教区、教会から推薦した人が牧師としてやっていけるか、その間のサポートの問題もあるが、召命の見極めは本当に難しいと感じることがある。
- ・教会奉仕の学びの場でもある→信徒がさまざまな形で学べるコースがもっとあってもいいのでは。

「信徒神学校」・・・信徒が（体系的に）学べる神学校があれば

高齢の志願者が学ぶための方法・・・3年でなく短い期間で学べる伝道師養成コース
通信教育はどうだろう？

教区で聖職養成塾を行っている中から志願者も出ている。遠方からも通って来られる人もいる。

～どういう教会形成をしていくのか～

- ・宣教の担い手は教役者だけでなく、一人ひとりの生き方に密接に結びついている。
- ・心の病をもった人、子どもをどう受けとめていくか。
- ・社会の病が教会の中に流れ込んでくる
- ・子どもを育てる→カリキュラム・教案
子どもから聞いていく・・・まわりの福音とつなげていく
起きる出来事に対して何ができるのか？というやり方しかないのではないか。

互いに聞く
共同体（教会）に

<話し合ったことのまとめ>

「宣教の担い手」とは聖職者だけのものではありません。すべての信徒が宣教の担い手です。そのためにも信徒教育(共に育つ)、ことに洗礼・堅信の準備教育がとても重要です。そしてその中で、「聖公会の5つの宣教の指標」に触れる必要があると思います。同時に宣教は具体的な事柄です。ひとりひとりの人との出会いが宣教の中身を作ります。ひとりひとりの存在が、すでに宣教の中身をわたしたちに告げています。

また聖職を志願する人びとに対しては、教会及び教区が、ひとりひとりの志願者との対話を通してその召命を見極め、彼らの召命に責任をもって参与することが求められていると思います。

第8分科会 『教区・教会の財政』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞
財政の問題は、都市化や過疎化の問題、高齢化や経済の課題につながっています。教区・教会の財政の課題をさまざまな視点で検討しましょう。



1. 各教区の現況 - 分科会参加教区の全てが「余裕が無い」状況
2. 財政問題とは - 教会が抱える問題の全てが集約された結果
- 財政問題は独立した問題として捉えられない

3. 具体的な事例

- 高齢者が逝去されると、その献金額を埋めるには、新しい信徒が3人は必要
- 高齢者は単に時間の経過と共に献金額を増加させてきたのではない
- 受洗・堅信時の社会的な状況の中で、本当に教会に感謝すべき経験を大切にしている
- このような感謝の気持ちを若い信徒に与えることができているだろうか
- 幼児洗礼を受けた信徒にも、このような信仰との出会いの感動を与えていくことが必要であろう

4. 財政の逼迫と聖職給与

- 教区間の給与格差の是正は必要である
 - ・ 実際にどの程度の調整額が必要なのか、どのような仕組みで調整するかはさておき、教区間での協働に一步踏み出すことが必要ではないか
- 支出項目で最大なのは人件費である
 - ・ しかし、赤字が増えるからといって、聖職候補を出さないという判断はありうるだろうか
 - ・ 苦しくても、教会としての本来の活動を支えるために、各教区は工夫できるだろう

そのほか話
し合いで
出た話題

経費と人件費の分担方法について

- ・人件費は援助補助方式が過半
- ・信徒数と献金額の各教会シェアに応じて総額を配分（一般経費）

関連施設と聖職給与について

- ・幼稚園等の園長やチャプレンを牧師が兼務する場合、a)給与をもらい、教区に還元する b) 一定額以外は給与はもらわない という二つのケースが混在している。

資産について

- ・教区の（土地）資産を売却しなければならない事態も発生しうる
- ・教会を統合するというのは本当に困難（信徒は教会に付いている）
- ・建築などに対する管区の融資制度はとてもありがたい。

＜話し合ったことのまとめ＞

日本聖公会のほとんどの教区が、信徒数の漸減傾向に伴って生じる財政の問題（献金の減少）で苦しんでいます。その財政問題を克服するために、各教区でさまざまな試みがなされており、今後もそれらの試みの情報交換が必要とされています。

現在の日本聖公会の財政を支えているのは、高齢の信徒の方々に負うところが大きいと思われます。そしてそれは、高齢の信徒の方々の信仰の証です。私たちはそれらの方々の信仰を学ぶとともに、献金教育（再教育）の充実を図ることが必要であると考えます。

教区財政の最大の支出項目は人件費です。しかし、財政が苦しいという理由で、今後、聖職候補生を養成しないという選択肢はあり得ません。どんなに苦しくとも、信徒は、聖職者と未来の聖職者を支えていく努力を惜しむことはありません。

日本聖公会総会においても検討されているように、各教区の教役者給与には大きな格差があります。それは、もはや見過ごしにすることのできない課題であり、私たちは、その格差の是正に向けてできることから着実に取り組んでいくことが求められています。

財政の問題は、結局のところ宣教の結果に他なりません。財政問題の克服のためにも、教会の宣教の業が今こそ問われています。

第9分科会 『礼拝と祈りの生活』

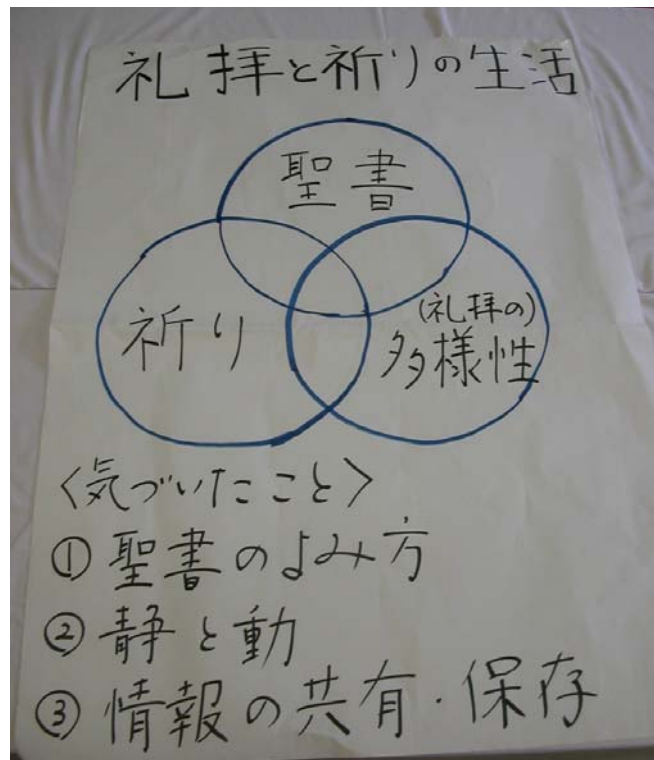
＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞
信仰者として何よりも大切な礼拝について、聖餐式、クリエイティブな祈りの時間、祈禱書、聖歌、互いに紹介しあいながら「祈り」について話し合います。



＜分かち合われたこと＞

「話し合いの中では提案やさまざまな意見がありましたが、＜話し合ったことのまとめ＞としては、それらを無理にまとめる、というよりは、キーワード的に表現して、分かち合っていたく時のとっかかりにしていいただければ、と思います。」（記録より）

- ・聖書 聖公会との出会い（ひとめぼれ）
- ・声に出して聖書を読む—雑念が入らない
- ・できるだけ淡々と抑揚をつけずに読む
- ・呼吸法
- ・聖書朗読とかの読み方をやっていきたい
- ・聖書の読み方のシェアリング
- ・聖書の読み方をスタンツとする。キャンプとする。例）キャンドル方式
- ・自分からの作業が大切
- ・キリスト—伝統、社会、福音につきぬける 毎日 礼拝と聖書
- ・時が良くても悪くてもみことばを宣べ伝える たんたんと
- ・「聖書」を祈る
- ・祈りが体になっていなかった
- 心とからだのちぐはぐさ
 - ・個人の祈り—共同体の祈り
- ・代祷 帰る道をお守りください・・・
- 具体的に祈る 信徒のことを思いながら祈る
- ・代祷の大切さ
 - ・黙想の方法を知っていく
 - ・現場で祈る大切さ
- ・ロザリオの祈り
 - ・生活の中に根づく祈りは力—生活そのもの
- ・ドラムも祈り—ゆるめる ゆるゆるの世界が福音、賛美グループ
- ・合気道一人とのつながり、祈れば福音が勝手に広がっていく
- ・企画 同じ人が参加しているが、その人たちが自分で自主的にするようになった
- ・教会の中だけでなく外へ
 - ・HPで伝える←関心をもって関わっていく
- ・教会生活がたのしい。自分がゆるされたように他の人もゆるされてきてほしい
 - ・分かち合いと出会い。どんなことが喜ばれるか。ふれあいの中で神様を感じる
 - ・ジェンダーを平等にしていく
 - ・いっしょにボランティア（災害）に行って、たちどまる大切さ
 - ・心理学
 - ・ストレス



- ・子どもとささげる礼拝、第5週にしている
 - ・平日、たとえば土曜日、夕の礼拝をやる。夜に四方山話もできる。思いをシェアする
 - ・こども礼拝、月1回子どものための礼拝、式文、聖歌も子ども用に作る。メッセージも信徒に話をしてもらう
 - ・聖歌隊、木曜日、いっしょに食事をして練習
 - ・神様へのアプローチは一つではなく多様
 - ・ろうそく、十字架、香炉などが教会につながるきっかけ
 - ・動と静。さまざまな礼拝がある
 - ・すべての感覚を使う礼拝—あらゆる人が参加できる 多様
 - ・韓国では礼拝が多様
 - 倒れる体験・・・信頼を感じた
 - 例)カリスマ的な礼拝(韓国のキャンプ)
 - ・ダンスや賛美でゆたかさを感じる
 - ・大人の日曜学校をしたい
 - ・歌(ワーシップソング)など礼拝にとりいれてもいい
 - ・霊的なものを取り入れる必要性
まずは聖書のことばを伝える
 - ・賛美集会、家庭集会・・・賛美歌中心の礼拝(韓国)・・・若者が多い、バンドも。家庭集会の式文(韓国)がある。高齢者など教会に来られない人も参加できる
 - ・人の集まる場で1分でもメッセージを語るようにしたい。決まった時間に行いたい。ギターなどがあってもいい
 - ・クリスマスキャロリングをやりたい
 - ・みことばの礼拝の中でお話をさまざまな方にさせていただく
 - ・G F Sが一番大切にしているのは礼拝。世界祈祷日ではテーマ国が、交替で式文を作成する。研修では、聖書の読み方、黙想を学ぶ→どこにいても出来る
 - ・大学のキリスト教学生会など：さまざまな教会から来ている人がいるのでぶつかりあいがある
 - ・学校をきっかけに教会へ。聖歌隊、ハンドベルなどの音楽 クリスマス大晩祷 聖歌隊とか全体と一緒に、昇天日は外で礼拝
- ・礼拝の小さいこと(例：主の平和の挨拶)をお互いにとりあうといいか～共有できるといい

・文書にまとめる部署がない

＜話し合ったことのまとめ＞

＜聖書のよみ方＞

聖書をよむことは「わたしたち」信徒に限らず「いのち」です。わかちあうことによってみんなの「いのち」全体が豊かにされます。

＜静と動＞

様々な礼拝のあり方を尊重しあって神さまから招かれた人々がもてなされ、ほぐされることはわたしたちの喜びです。

＜情報の共有と保存＞

礼拝・祈り・聖書のわかちあいといった多様な賜物を共有するために、情報を保存していくことも大切です。

第 10 分科会 『組織・教区間協働』

＜このテーマの設定にあたって～実行委員会呼びかけ文から＞

宣教する共同体として、一人ひとりのタレントが生かされる組織とはどのようなものであれば良いでしょうか。また教区間の協働によって豊かになった取り組みの事例に耳を傾けながら、さらなる可能性について検討します。



1. 世界が広がる！

協働していくメリットは文字通り“世界が広がる”こと

2. ダイナミックさが無くなる

人数が少ない→同じ人がいろいろな役割を担当することが多くなる
→考えや見方が固定されがちになる
→動きが限定されがち・・・

3. やってみる！

とにかくどこもやってみたことがないのだから成功例がないのも当たり前。できるところからやってみるしかないのでは？

4. 北海道と東北 京都と大阪

すでに教区間で「協働」を決議しているところもあります。

5. 神戸と九州と沖縄 know how で

まずは経験やノウハウ、知的財産を共有することから。

＜話し合ったことのまとめ＞

日本聖公会は、11 の教区から成っています。そしてこれまで各教区がその地の宣教の業を担ってきました。それは各教区の自主性を育み、日本聖公会を豊かにしてきました。しかし自分の教区での宣教の業に専念するあまり、他教区への関心を失うことがあったことも事実です。また現在の聖職者の少なさ、特に一桁になるような教区では、働きのダイナミクスを損なう恐れがあります。

今、教区間協働が呼び掛けられています。いくつかの教区がこの呼び掛けに応え、実践しています。協働を行った教区は、他教区の人びとと顔の見える関係になり、自分たちがそれをとおして豊かにされたことを報告しています。協働は聖職だけでなく各教会の信徒同士、教会同士の交わりにおいても豊かにされていきます。

将来の教区同士の合併・合同も議論に上っていますが、教区間には、伝統の多様性があります。一方、聖職者の給与格差などが存在していることは、人事交流や教区が合同する場合の課題となります。しかし、それらをすべて解消してから合併・合同を目指すというよりも、今できることを着実に実践してゆき、教区間協働をとおして、互いに信頼し合い、信仰生活がより豊かにされてゆくことが、まず取り組まれることであると思います。

13. 閉会にあたって～メッセージ（１）

＜今回基調講演の一つを引き受けて下さった西原廉太司祭から＞

お時間いただきましてありがとうございます。今回、お招きいただき、最後までフルに参加させてもらい、皆さんからいろんな物語を聞くことができて、私自身、命の水を、糧を与えていただいたと思い、感謝しています。私の講演がどれだけ役に立ったか自信はありませんが、短く 2 つだけ言い足りなかった、というか言い忘れた点について、お伝えしたいことがあります。それは、聖公会が大切にしてきたアングリカニズム、聖公会の神学が大切にしてきた教会論、教会理解があるんですね。よく言われている事柄なんです、
「バルーン型＝風船型」教会論と「鳥の巣＝バードネスト」型、というおもしろい論があるんですね。何かと申しますと、バルーン型、風船型というのはどんどん自分を膨らまして大きくなっていく。いいんですが、風船は大きくなりすぎると自分ではじけたり、針で突かれたりするとあっという間に破れてしまう。で、そうではなくて、聖公会が大切に行っているのが「鳥の巣型」なんですね。鳥の巣は、一本一本形が違う小さな小枝によって大きな巣になる。そしてそれを神の愛、主の愛という泥でもって一主の愛を泥と言うのは何ですが—その愛の泥で紡がれて大きな巣になる。で、それが聖公会の教会なんだと。でも私のイメージでは、最初、「鳥の巣」というと、いいイメージじゃなくて、軽いし、上から落ちて踏みつけられたりして、何だかすぐ壊れそうだと思っていたのですが、あるとき立教でもその話をすると、理学部で鳥のことを専門に研究している先生が、「西原さん、何言ってるんですか、鳥の巣というのはああ見えて落としたりでなかなか壊れない頑丈なものなんですよ」と教えてくれました。確かに風船と違って針で刺しても壊れませんし。隙間だらけで破れないし・・・まあ確かにスキだらけなんですけどね。（笑い）形も見栄えもありませんが、しかし、しっかりつながっている。そしてその中で新しい命が育まれていく。そういう意味では、皆さんや皆さんの教会は、一本一本の小さな小枝で、それが積み上げられて、それが大きなコミュニオンになっている。そこでは新しい命が育まれる、そんな場所だと思います。この 3 日間、プログラムに参加して、皆さんのお話一つ一つがその小枝だなあと感謝して聞いていました。

二点目は、「宣教の 5 指標」について講演でご紹介しました。英語ではファイブマークスミッションと言います。もう一度振り返っておきますと、1 番目が神の国の福音を宣言する、2 番目が新たな信徒を教え、洗礼を授け、養うこと、3 番目が愛の奉仕によって人間の必要に応えること、4 番目、社会の不正義な構造の変革に参加すること、5 番目が、被造物の完全さを守り、地上の命を保持し、新たにするため努力すること、それを聖公会は大事にしてきた、とお話ししましたが、実はこれ、直訳なんですね。日本語としてこなれていない。あるいは正確さを期すために、英語をほぼそのまま日本語にした直訳なんですね。で、この 5 つの指標を、それぞれの管区が、しっかり自分の言葉にして欲しい、ということなんです。私の直訳を大事にしていいただいているのはありがたいのですが、そ

うではなくて、2012 年の宣教協議会本番に期待しているのは、このファイブマークスミッションの一つひとつを、日本聖公会の今回シェアしたような現実やビジョンの中で日本語にして欲しい。日本語で、福音を宣言することに始まって、被造物まで、一つひとつを私たちの言葉にしていけないだろうか。言わばですね、「ファイブマークスミッション of NSKK」。日本聖公会の5つの指標はこうなんだ、というものを積み上げることをまとめにしてほしい。それが実は今度の宣教協議会の大きな目標ではないかと個人的には思っています。日本聖公会全体というより、各教区の、各教会の、宣教方針を持ち寄りながら、管区全体としてこういう5指標を持っているというある種のまとめにして欲しい。そしてできたら、聖公会手帳のトップに載せる。せっかく作るのですからせめて20～30年はもつようにしたい。植松主教様も午前中の時間にそのことをお話しになって、改めて感動いたしました、そしてそれを今度は英語に訳して、日本聖公会はこういうことを考えているんだ、と世界に発信したら世界への貢献となるのではないか。そのことが世界を引っ張って行く力にもなり、全体が豊かにされることにもなるのではないか。だから今度の宣教協議会は、日本聖公会だけのことでなく、世界の聖公会、今、大変きびしい状況がありますが、それを癒すことにもなるのではないか。それが日本聖公会の立つ位置だというのは本当に重要なことです。日本からそのことを発信できるのではないか。何だか大統領演説みたいになってしまいましたが（笑い）そう思っています。期待しております。ありがとうございました。

メッセージ（２）　＜植松誠首座主教から＞

最初に申し上げたように、皆さん、いろいろな日常のこと背負いながら、これだけの方たちがここに集まった。よく来てくださった、と言いたいんですね。そのことをほんとお互い「おめでとうございます」と言い合ってお祭りにしたいと思います。私はこの3日間ほんとに楽しかった。いろんな方々とお会いでき、語り合い、日本聖公会にこれだけすばらしい宝がすみずみまである、普段そのことをあまり考えてなかったけど、この日本聖公会、意外や捨てたもんじゃないと今、心の底からそんな思いがしています。再来年には本番の宣教協議会があります。今回私は分科会で高齢者のグループに入りました。今日のお昼前のグループで出たことはですね、まとめをご覧になったと思いますが、「高齢者は宝です」とそこに書いてあるんですね。高齢者は長い生涯送ってこられて、その方たちから学ぶことはたくさんある、すごい宝なんだ、と。でもそれじゃあまずいんじゃないか。それ、高齢者自身からの視点じゃないんですね。私たちからの視点なんですね。高齢者の方々を前にして、私たちが、「あなたたちは宝だ」と言いたい。本人は、ひょっとしたら「自分たちは迷惑をかけてて、いなくてもいい存在なんだ」と思ってるかも知れない。それに対して、「いや違う、あなたの存在がすばらしいんだ」と、そう言いたいんですね。でも、そのことを、「私の存在自体が本当に宝なんだ、すばらしい」って高齢者自身がそう思ってくれなくては困る。そのことを私たちのグループで午前中話しました。で、それは高齢者の

ことだけでなく、私たちひとり一人が天国への召しがあるまで、私たちというのは、宣教の第一線の担い手、私たちの存在というのは神様から祝福されたすばらしい存在なんだ、ということをお話し合ったんです。同じことを皆様に申し上げたいと思うんです。私こそ、神様から遣わされた宣教の担い手、イエス様の使徒なんだ、ということ。2年後の宣教協議会のときに、ここにいて一人ひとりがコアになってくださる、と思うと、「まあいろいろな試練があるけど、大丈夫さ」とそんな思いがしています。実行委員の皆さんも一生懸命してくださいましたが、これからは私たちも実行委員まかせにはいけないと思いますね。各教会、教区、それを結ぶ責任が私たちにある。次に集まるとき、そのとき、日本中の教区、教会からみんながそれぞれの思いを持って、それぞれの責任を持って、それぞれの夢や希望を持って集まれる、そのことのための、今回の私たち一人一人なのではないかなあと。ですから、そういう意味では「私たち全員が実行委員だ」という気概をもって、散っていったらいいのではないかなと思います。そういう意味でほんとに私は、今回はすばらしいお祭りだったと思います。今回の皆様お一人おひとりに感謝したいと思います。皆さん、ほんとうにおめでとうございます。

14. 閉会の挨拶

実行委員長 主教 谷 昌二

初めに、一つお話をさせていただきたいことがあります。それは、分科会の「正義と平和」の報告の時に出示されましたことですが、教会の中に、この“正義と平和”という言葉や、そこで語られる内容について拒否反応がある、というご発言がありましたことに関して、私の思いをお伝えしたいのです。今回が初めてではなく、しばしばお聞きすることではありますが、しかし、これは私たちの信仰の核心に係る大変大きな問題だと感じています。

主イエスがご復活されて、戸を開け、恐れている弟子たちの真ん中に立ち、十字架の釘跡を示しながら、最初に語られたことばが「あなたがたに平和があるように」でした。十字架の上に人間としての一切を、父なる神に捧げ切って、死んで葬られ、そして、新しい命に復活され、私たちに神の永遠の命の道を開いてくださった主イエスが、最初に語られたことばが、「あなたがたに平和があるように」。もはや、私たちは、死を恐れずに生きていける喜びの道が開かれたのです。ここに平和がある。

逆に言えば、死を恐れ、自分の命を守ることから、私たちの暴力が始まることを教えられた体験をしました。昨年暮れに、那覇市が、「非武装地域宣言」をしようという運動を起こしました。これは、ジュネーブ協定追加第1議定書に基づくもので、ある都市が、非武装地域宣言をして、ここには戦闘員はいません、移動兵器もありませんということを明確にすると、もしも戦争が起こった時に、この都市を攻撃してはならないという規定です。

有権者の50分の1の署名で、市議会に条例を制定するように要求することができ、そこで可決すれば、その都市は「非武装地域」として国際的に認められるものです。これまでに日本の各地でこの運動が行われてきて、署名は集まるのだが、いざ議会で審議されると、なかなか通らない。もし、この沖縄の那覇でこれが通れば、わが国で初めてのことになる。あの沖縄戦の痛みを知っておられる沖縄に大いに期待するとのことでした。

この運動が始まったとき、カトリックの松浦悟郎司教が来られて、講演をしてくださいました。その時、私の心に残った一つのことがあります。それは、「非武装という言葉を開くと、猛烈に反抗して来る人がいる。人の心に、非武装に対する非常に強い抵抗があるのを感じる」ということでした。それを聞いて、私の心はどうか、と振り返り始めました。

私自身、本当に非武装なのか。いやー、そんなことはない。ちょっとしたことで腹を立て、「このやろう、こんちくしょう」と、先ずは言葉の暴力、そして、本当に腕力を振るう暴力、それを正当化する論理。正当防衛＝身を守るためには、暴力は仕方ない。相手の暴力には、暴力しかない。暴力を正当化する制度が作られ、権力がそれを握り、組織化され、武装され、そして、戦争が正当化されていく。この過程の一番初めは、私たちのうちにある暴力への肯定、暴力を使って当然という、人間の心の奥底に潜む、暗黙の了解です。

その根本にあるのが、「死に対する恐れ」です。死を恐れ、命を守るために、私たちは暴力を使う。主イエスは、この死の恐れから私たちを解放してくださった。もう暴力はいらない。復活の命、神の永遠の命の道が開かれた。そして、聖霊を通して、すべての人にもこの道が開かれた。ここに私たちの平和がある。平和こそ、私たちの信仰の核心。正義とは神の愛。この死を恐れない平和の心をもって、人々に仕え、神の愛＝正義を実現するのが、神から託された私たちの使命なのではないでしょうか。

那覇の運動の結果ですが、署名は、50分の1をはるかに越える数が集まって、いよいよ議会にかけられたのですが、結果は、さんざんでありました。全く問題にもならない、というような強い反発で、条例案は否決されたと聞いています。逆に、そのことがあって、以後、非武装を私の問題として受け止めようとしてきました。信仰によってしか、人類の平和、非武装、非暴力は実現しないのではないか。逆に、信仰があるからこそ、それは実現できる、その力を発揮する必要があるのではないのでしょうか。

さて、植松主教様の初めのご挨拶で、「このプレ宣教協議会を、お祭りとして楽しくやりましょう！ 宣教150周年の『漕ぎ出せ沖へ』のビジョンをしっかりと見つめながら」との励ましのお言葉をいただいて、この協議会は始まりました。

私たち一人ひとりが当事者として、熱い思いをもって3日間を過ごすことができましたことを心から感謝いたします。今、私は、ある確かな感動をもってここに立っています。そして、ほっとしています。かなりプレッシャーがありました。でも素晴らしい実行委員の皆さんが、全て支え、導き、まとめてくださいましたことを、心から感謝します。又、各講師の皆様へ感謝します。特に、聖公会の豊かさとその可能性を語ってくださり、最後

まで付き合ってくださった西原廉太司祭に感謝します。又、経済を中心にして、わが国の厳しい現実を、詳しいデータを用いてわかりやすくお話し下さいました榊茂樹さん、現場の声をユーモアたっぷりに、厳しい助言を交えながらお話し下さいました鈴木育三さん、教会の働きの中で、現在なされている社会的働きの経験からお話し下さいました大町信也司祭様、ありがとうございました。

私は、正直申しまして細かいデータを整理しまとめるのが苦手であります。実行委員会の中でそれぞれの委員が賜物を生かし、三つのアンケートに関する膨大な回答をまとめ、図案にしてくださったり、多くの資料・案内を作り上げてくださったり、と準備にあたってくださいました。ありがとうございます。

今回の協議会で話し合われましたものをもとに、これからどうか各教区、そして、一つ一つの教会レベルでまで、2012年に向かって話し合い、内容を深めていただけたら幸いです。よろしくお願いします。

沖縄教区では、9月23日に早速、この会の報告会と、沖縄の現実に合わせて話し合いを持つことが計画されています。中部教区でも9月4日に、他の会合の折にこの協議会の報告、分かち合いがなされると聞いています。どうかそれぞれの教区でも、できるだけ早い機会にご計画くださいますようお願いいたします。

私は最近、“キリスト衝動”ということばに出会いました。キリストの愛が私たちの中に迫ってきているというのです。困難があればあるほど、試練があればあるほど、キリストは、私たちに豊かな愛を注ぎ、私たちの信仰を強くしてくださる。私たちは、その差し迫ってくるキリストの愛をより強く感じ、愛の行動へと促されている、というものです。

私たちの教会の、又、現実社会の厳しい現実を踏まえて、話し合い、学びあい、祈り合ったこの協議会で、私は皆さんの熱い思いの中に、キリスト衝動が確かに働いていることを強く感じました。どうか、互いに励ましあい、祈り合いながら、このキリストへの熱い思いをさらに豊かにして、2012年を迎えたいと思います。

プレ宣教協議会を通して与えられたたくさんの恵みを、主に感謝します。ありがとうございました。

<参考>

宣教する共同体のありようを求めて
プレ宣教協議会報告書

2010年12月31日発行（470部）（非売品）
編集 日本聖公会 プレ宣教協議会実行委員会
発行者 日本聖公会
〒162-0805 東京都新宿区矢来町65番地
電話 03-5228-3171